ハイスクールD×D　　古龍と暮らす魔人

ホーランド

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テンプレよろしく幼女神の間違いによって死んでしまった、おっさんが特典を貰って古龍たちと楽しく暮らす話し

誠に勝手なのですが今までの話を見直して来てかなり

ん？と思うところが出てたので書き直しをさせてもらいます。内容はさほど変えないつもりですが能力に変更があるかもしれません。

目次

プロローグ ―― 1
1話 前編 ―― 10
1話 中編 ―― 17
1話 後編 ―― 25
2話 ―― 42
3話 ―― 52
4話 ―― 67
5話 ―― 78

プロローグ

???

「此処は・・・どこなんだ?」

気がつくと俺は辺り一帯真っ暗な世界に居た、まぁ真っ暗と言っても自分の姿は分かると言う謎仕様だけど、兎に角移動しよう、進めば何かあるかもしれないから

移動中・・・・

???

「何かあるかもって考えた奴誰だよ・・・・何もねぇよ・・クッソたれ」

クソッ!どんだけ歩いたと思ってんだ!かれこれ数時間は移動したぞ、つーか移動してんのかこれ?なんかそんなこと考えてたら疲れてきた・・・・ ここらで少し休むか・・・・

???

「つか何で俺はこんなところに?・・・・少し整理してみるか」

よし、ならまずは名前からだ、俺の名前は龍ヶ崎　龍牙【りゅうがざき　りゅうが】歳は２９で身長は１７５位で体重６５だったかな、忘れたまぁんなもんだろ、見た目は友達が言うには、俺は狂い月に出てくる主人公にそっくりらしい、確かに似てるけどよぉ、そろそろ３０のおっさんと高校生を比べるなと言いたかった・・・話がズレたなで、確か次は何処で何をしてたかだ、俺はあの時・・・・仕事が終わってコンビニで酒とつまみを買って、家に帰って飲んで・・・・でここに居た・・・・全ッ然わからねぇ!

???

「やっと見つけました!!」

と頭を抱えているところに幼女の声が聞こえてきた・・・・・え、誰?

幼女?

「何でこんなところに居るんですか!その場でお待ちくださいって書いてあったのに!」

はぁ!んなもんあったのかよ!?じゃなくて!

龍牙

「知るか!それよりお前は誰だよ」

幼女?

「私は女神です!」(　・´ー・`)ドヤァ

(#^ω^)ピキピキ

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

幼女神

「(´；ω；`)ブワッ」

龍牙

「で、お前が女神なのは良ーくわかったし、俺の身に何があったのかも理解したし過ぎたことはもうこれ以上言わん」

で、なんでこうも俺がお怒りかは理由がいくつかあるが掻い摘んで言うとこいつが書類を整理していたが間違えて俺の事が書かれている物を処分してしまったと、その際燃やしてしまったため現実の俺は火事で焼け死んだと、これだけならまだいい、いや良くないがまだいい、問題はこいつの態度だ、素直に謝るかと思ったら【ごめんねー、間違えちゃった☆てへっ】まあこれでブチ切れました、俺は見た目が温厚そうに見えるためよくなめられるがキレるとヤバいと自覚している、取り敢えず、しばきましたで泣きながら死なせてしまったお詫びに転生させると、で特典6個くらい上げるからと土下座までしてきたので勘弁してやった

龍牙

「で、転生って言っても何処にやるつもりだよ」

幼女神

「グスッ・・・はい、ぇっと・・ハイスクールD×Dの世界です・・・」

あ～あれね、知っているけどよく知らないんだよな吸血鬼君の所まではなんとなくは知ってるその後は知らんまあいいや

龍牙

「で、特典か、うーん・・・・・よしこれにする」

・ＦＦ１５のファントムソードとシフト能力、メビウスＦＦのジョブとエレメント魔法を使えるようにして、アイテムを無限

・テラフォーマーズのすべての変態能力と他の生き物を取り込む事でその生き物にも変態できるようにする

・ペルソナ　トリニティソウルの主人公のペルソナで今までのシリーズの魔法を修行次第で使えるようにして無限成長できるようにする

・自分の知っている武器を造れるようにし、その武器を使っていた人物の技を使えるようにする

・俺を魔人として転生させこれもまた無限成長できるようにしてほしい

・鉄拳シリーズに登場したキャラの技を使えるようにする

龍牙

「この６つで頼む」

幼女神

「分かりました、これで新たに作成しておきます、貴方は魔人に何ますのでほぼ寿命がなくある程度まで成長すると不老になります、ただし普通に死にますのでそこは気お付けて下さい、しかしなかなかの脳筋スタイルですね、魔法系の物はペルソナやメビウスＦＦの魔道師ジョブで他はほとんどが接近メインですね何か訳でも？」

龍牙

「いや、特に意味はないただ自分が好きなやつを言っただけだし、何より俺は遠くからチマチマするよりも近づいて戦う方が俺は好きだからな、後ジョブはたまねぎ剣士から初級ジョブ初級魔法からスタートしてくれ、そっちの方が成長出来てるって思えるからな、さてこれ以上俺はないから、これでお別れだな、今度はミスをするなよ」

そう言うと幼女神はむくれてわかってますよと、言って後ろを指さした

幼女神
「その先の扉を出ればあなたの転生は終ります、ではよい人生を・・」

その言葉に頷き扉を開けたのだが、ふといきなり浮遊感を感じて下をみるとなにもなーい・・・つまり

龍牙
「マジかあああああああああああああ!!!」

幼女神
「さっきのお返しです・・・あっ・・・原作開始より５０００年前に送っちゃった・・・まあ大丈夫でしょ彼女達に任せれば・・・・」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

龍牙
「いたたたた・・・まさか落とし穴とか笑えねぇ・・・」

ん?なんか声が高いような・・目線が低いような・・・おいおいマジかよ赤子スタートじゃないけど見た感じ俺小１ぐらいじゃやねーか!と思っているとふと視線を感じたので後ろを振り向くと額に一本の角を持ち白い体毛、馬のような見た目に紅い目・・・・うん・・完全にモンハンのキリンが目の前に・・・・やばくね・・・

キリン
「・・・・・・」ジーーーっ

やべぇ・・・めっちゃ見てるし若干敵意見せてるし、俺はゆっくりと立ち上がると後ろに下がる、がキリンはこちらに来る

龍牙

「(こっち来るなよ!)」
そう内心悪態をつき更に下がる、それと同時に近づいてくる、そしてまた一歩下がるとなにかふさっとした感覚が背後から・・・(_ д。)
あらやだ・・・黒いキリンが真後ろに居るじゃないですか・・・・
／(^ o^)＼
ええいこうなればもう自棄だ!とっさに俺は懐からミンティアタイプの入れ物から錠剤を出し口に放り込む、すると腕や足の筋肉は一回り程デカくなり額には6つの赤い目が現れ、変態が終わると俺は足に力を入れキリンとは真横に走り出す、その速度は子供とはいえとてつもない速さ普通の者なら消えたように見えるばすだ、すぐに後ろを見ればもう見えなくなっていた、たった5分位走っただけだが既に息も荒くなり始め足を止め息を整える
龍牙
「はぁ・・・ はぁ・・・ 流石アシダカグモ、もうキリンが見え「バチィ!」・・・ は?」
ないと言いかけたとたん真横を何かが自分の走っていた倍の速さで通りすぎて行った、俺は軽めに歩いていた足を止め目の前を見ると
キリン
「・・・・・」バチバチ
雷を纏ったキリンが目の前に佇んでいた、しかもこっちはさっきの移動で既に息があがっているにのに対して向こうは何事もなかったかのように立っていた
龍牙
「嘘・・・ だろ・・・ はぁ・ はぁ、あれだけ移動したんだぞ」
ペルソナは今現在使えない、ファントムソードも出すこともできない、あるのはたまねぎ剣士のジョブと人為変態能力のみしかもこれもまた接近メインのアシダカグモ、仮に剣を持ったとしても、この体だ自分の武器に振り回されんのが落ちだ、まともに戦えば勝ち目はまずない、そうこうしているうちに背後に気配を感じ、ちらっと背後を見ると亜種か既に後ろにいた、再び走ろうとしても先程の疲れで足がもつれて倒れてしまう

龍牙
「くっ」
慌てて立ち上がろうとするも、足が生まれたての小鹿のようにガタカダになっておりうまく歩けずその場にまた倒れてしまうがその時誰かが話し掛けてきた
「そう急くな私たちの話を聞け、人の子よ」
龍牙
「・・・・・・・は？」
突然聞こえてきた声に俺は倒れながらも思わず辺りを見渡したが誰も居らず呆けていると再び女性の声が聞こえてきた
「何を呆けている、私の声が聞こえないのか？」
龍牙
「え・・・・まさか・・・・お前が話しているのか？」
俺の向ける視線の先にはキリン亜種がいた、亜種は自分に気付いた俺をじっと見ていた
キリン亜種
「そうだ、なんだしっかり聞こえているじゃないか」
あるぇ？ここのモンスターは話せるのかよ！つかここってハイスクールD×Dの世界だよな？なんでモンハンのモンスターがいるんだよ！え？何これもしかして他にもいるのか？と、取り敢えず冷静に落ち着いて対処するんだ
龍牙
「お、俺になんのようだ？それにここは何処だ！」

キリン亜種
「落ち着けまず始めの質問からだ、ある神からお前の面倒を見てくれと頼まれてな、面白そうだったし今後に役立て行こうと思ってな、了承したのさ」

おい！面白そうってお前それでいいのかよ！しかしある神？
龍牙
「それって見た目幼女だった？」
キリン亜種
「そうそう、そいつだ」

あんのガキ頼んでもいないことを！ま、まぁとにかく話を聞こう

龍牙
「でもなんでよりによってお前なんだよ、多分だけど他にも古龍は居るだろう？」

キリン亜種
「その場で食い殺されてもいいなら居たがどう「遠慮させていただきます」・・・・ そうか・・・・」（；・ω・）

流石に即答されて困惑するキリン亜種、だって考えて見てよその場で食い殺すって絶対あいつやん、絶対ジョーさんやんとか、思っていると・・・・
キリン
「そろそろ本題入ったら？」
龍牙
「本題？」

そこで今まで無言だった原種が話始めた

キリン
「そう、実はね僕ら子供が欲しいんだけどなかなか出来なくてね、もしもの時の練習をしときたいって言うのがあってね、だから君さえよかったら、僕らと家族にならないかい？それに僕らも相当強い自信があるから君も力の使い方なんとかできるんじゃない？」

龍牙
「いや、練習って俺は人なんだけど、けどまぁ確かに言ってることは分かるけどなぁ、でも俺は人でお前らと食いもんもだいぶ違うし何よりいきなり言われてもって感じでさ・・・・」

キリン亜種
「まあ言いたいことはわかるがこの冥界で食料を探すとなると相当苦労するぞ？なら多少我慢はすべきではないか？それに私たちはそれなりに多く知り合いがいるソイツらに肉は分けてもらえばいい一人分くらいなら何もいいやせんよ・・・・ 多分」

龍牙
「おいこら、今多分って言っただろ！多分って！・・・・ まぁいいやそれよりここが冥界って聞こえたんだか？」

そう、今の会話の中でも一番重要なのが此処が冥界であるということだ

キリン
「そうだね、ここは冥界の最奥にある場所、〝龍結晶の地〟ここまで来るには他のモンスター達に認めて貰わなければならないから、悪魔も堕天使もそう簡単に入ってこれはしないよ、どうする？」
なんかこれもうほとんど拒否権無いよね、あからさまに俺養う気満々だし、確かに言いたいことはわかるよ今の俺はボッチだし家無いし食べ物もない・・・・ あれこれ俺に選択肢ないやん・・・・ そうなるとやっぱ多少の我慢はいるかぁ・・・・

龍牙

「・・・・ わかった・・・・ 俺の負け、なるよ家族・・・・ これで満足？」

そういうと2頭は軽く頷くとこちらに寄って来て俺を挟み込むように座りこんだ、なんだ？と思うと原種の方が膝立ちの自分の体を軽く押す足腰がガタカダの俺は簡単に亜種のお腹部分に倒れ込む、急いで起きようとするも亜種にそのままになっていろと言われたから、しぶしぶお腹にもたれると眠気が襲ってきた、無論今の体じゃ眠気に抗うことも出来ずそのまま意識を落とした

だからだろうか、先程原種が自分の能力を知っている事について聞くのを忘れてしまった

1話　前編

どうも龍牙です

あれから大体千年位かな？経ちました、見た目も大体大学生位になった、そしてこの千年特訓を重ねに重ねまくってようやくファントムソードや幾つものジョブ、ペルソナをまともに扱えるようになりました、あれってゲームじゃポンポン武器出したり、ジョブチェンジしてるけどやってみると実際かなり難しい、母さんによるとファントムソードは武器を出すことに意識が行き過ぎていて、ろくにイメージができていないとの事、ジョブに関しては数を持っても使いきれなければ意味がない事を、散々説教されたよ、まぁ言われてしてみたもののうまくいかないんだよなー

後家の親たちにここ最近手合わせしてもらってるんだけどさ・・・・メチャクチャ強いのなんのって・・・・　こちとらモンハナシャコ＋ヒートライザ、チャージ＋バフもりもりのスーパーモンクの『ファイナルヘヴン』っていうのに、当たるやん？えっなに？的な感じでその倍以上の蹴りが飛んできたときは、あっ死んだわって本気で感じた、ペルソナ育てまくって良かった～、物理耐性がなければ即死だったよ・・・・　っても一週間は寝たきりだったよ・・・・と言うか話大分、変わるけどここのモンスター達は皆擬人化出来るらしくてさ、俺に肉とかいろいろ分けてくれる女の人が居るんだけどさ、見た目黒髪美人なんだけど・・・・　ハイ、ジョーさんです、始め見たときなんて、まんまモンスターの姿で出てきてさ、迫力ヤバイのよ、見た瞬間『あっ無理』って思ったもん、でもなんだかんだ言ってやさしい人？竜？でな、いろいろくれたりするんよ、でもね・・・・　いきなり「お前が本当に王にふさわしいか見極めてやる！」って言って殺しに来るのやめてもらえませんかね！いくら手加減してるからって腕もっていくのは勘弁してください、再生するのに結構体力持ってかれるので・・・・　そんなこんなあり、ある程度戦えるようになりました

―――――――――――――――――――――

龍牙
「いや、前置きなげーよ!?」

リン
「ど、どうしたいきなり大声だして!?」
龍牙
「あ、いや、なんでもないよ、母さん」
イカンイカン、前置きの長さに思わずつっこんでしまった

ジョー
「リンよ!あまり気にしたらいけないよ、さぁ龍牙よ!ご飯が終わったらまた殺るとしよう!、この間は私が腹が減ってやる気を無くしたからな、だが今日は大丈夫!たらふく食べたからどれだけでも行けるぞ!」
ちょっとなに言ってるかわからない、そもそもいつから居たんだよ、俺がここに来たとき居なかったよな、どこから入ったし
ジョー・リン・シロ
「「さっき窓から入っ（た）（てきた）（たよ）」」
龍牙
「折角家作ったんだからドアから入れよ!つかアンタらなに心読んでんだよ!?あと母さん!なにしれっと入れてんの!今更だけどこの人あれだよ!これでも生態系おかしくする人だよ!なんとかしようとか思わないの!」
シロ
「大丈夫でしょ、年がら年中お腹空かしてるけどなんとかなってるし」
親父!あんたはそれでいいのかよ!
龍牙
「そうかよ、ならジョーが母さん特製のヨモギ団子食った事は・・・『ビリッ!』・・・・ いいんだ・・・・」
ちらりと親父を見ると顔は満面の笑みを浮かべながらジョーを見

る、心なしか雷纏ってるように見えるのは多分気のせいだろう
シロ
「ハハハ、ジョーさん此れから暇だよね、僕ここ最近運動してないから手伝って欲しいな」（#＾∀＾）ハハハ
ジョー
「え、いや、ちょまっ・・・・助けて龍牙！」
この世の終わりのような顔をしながらこちらに助けを求めるジョー、しかし親父の好物食ったあんたが悪いんやで

龍牙
「母さんおかわり」

リン
「よし、任せろ」
流石の母さんでもキレた親父は手に負えないらしく、ジョーは首根っこを捕まれ親父に引きずられて行った、その数分後に女性の悲鳴がここら辺りに響き渡った・・・食い物の恨みは恐ろしい、それは大食いの君か一番知ってるやろも

と、まあこんなことがありながらも楽しく過ごしています、だけどここ最近やたら火山と極海が騒がしい・・・・
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
〈翌日　ｓｉｄｅ龍牙〉
翌日いきなり母さんに呼び出された何だろうと思い向かうと
リン
「龍牙、お前にやって貰いたいことがある」
龍牙
「やってもらいたいこと？」
リン
「ああ、ここ最近火山や極海に異常現象や異常気象が起きている、おそ

らくテオ三兄妹が起こしていると思う、だからお前になんとかしてほしい」

龍牙

「いや、いきなり言われても困るんだけど、つかそれ俺一人でやらないといけないわけ？」

火山と極海って俺に死んでこいと・・・・　あれ？でも確かテオって・・・・

龍牙

「なぁ母さんテオってナナ以外に近縁種って居たっけ？」

俺の知る限りじゃいないと思うんだが、なんか居たっけ？

リン

「ん？なんだ知らないのか、テオとナナには後一頭トア・テスカトラと言う妹が居るんだ、凍王龍と言われているがれっきとしたメスだ」

は？俺はそんな奴知らんぞ！ワールドやフロンティアに・・・・・・・・

まさか

龍牙

「（まさかトア・テスカトラってフロンティアか!?フロンティアやってないから分かるか！これはまずいぞ、非常にまずい行動パターンとか分からね！つかこの世界にパターンなんて意味がなかったよ！）いやいや！死ぬから！普通に死ねるから、火山に極海って普通行かねぇよ！」

リン

「お前の為でもある！真なる王になれるなら行ける・・・・　筈・・・逝ってこい！最悪骨は拾ってやるから・・・・」

龍牙

「小声でも聞こえてんだよ!?ざっけんな!それ俺死ぬの確定してんじゃん!せめてオトモとかいないのか!」

リン

「えぇい!やかましいそんなもの居らん!」

そんな逆切れして言わんでも、マジかよ…… ソロで討伐とか……はぁやるしかないかぁ…… 王とかそんなんいいから行きたくねぇ…… そう言って俺は頭を抱えながら装備を整えてまずは火山に向かった

―――――――――――――――――――――――

〈side???〉

龍牙が火山に向かう少し前……

???

「なぁ、今回の候補は本当にまともなんだよな」

まるでライオンを思わせるフォーム、その頭部にある後方に伸びる長い角、口外に露出した鋭い牙そして全身を覆う赤い鱗に赤い鬣を持つ古龍がそう言うとその近くに居る青い鱗を持つ古龍がその龍に返答する

???

「キリンの話じゃそうらしいけどね、だけど前みたいなのは勘弁してほしいかな…… もうあんなのは…… 嫌だな…… テオ兄様もそう思うでしょ?」

テオと呼ばれた龍は青い龍に近づくとその舌で青い龍の顔を舐めて落ち着かせ、近くに座る

テオ

「まあな、力があるくせに、それを己の為にしか使わず、暴虐の限りを尽くすクソ野郎だったからな、もしも今回もクソ野郎だったら俺が灰

すら残さず消してやるからよ、兄貴の俺に任せな、しっかり守ってやるよ、ナナ」

ナナ

「・・・・うん、でもトアは大丈夫かな」

ナナと呼ばれた龍はもう一頭の妹を気にかける

テオ

「大丈夫だ、なんせ俺の妹だまず負けねーよ!あいつは、それにしてもお前も俺の妹なんだ、もっとシャッキッとしろ!そんなじゃ嫁にも出せねーよ，つか貰い手すら見つからねーな」」（、Д、 ）「ヤレヤレ

ため息を吐き首を左右に振る

ナナ

「ひどい!」ペシ　C=（、へ、#）

テオ

「痛て」

なんやかんやで仲のいい兄妹である

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

〈ｓｉｄｅ龍牙〉

龍牙

「本当、これどうやったらこんなに涼しくなるんだろう?」

俺は右手に持ったクーラードリンクを見ながら火山を進んでいた、因みに今の装備はメインジョブに円卓の騎士でサブジョブにシノビマスターである、他には武器を剣士用のエクスカリバーでレンジャー用は朧月にしている、これと後ファントムソードにしている、今回変態する為の薬は置いてきた（と、言うより持って来るの忘れた）火山をしばらく進み続けると周りを囲むようにカルデラが現れた、地形の四割は溶岩が流れている、フィールド入ったと同時に視線と僅かな殺気を捉えた

龍牙
「・・・・・・テオ、いるんだろ！出て来い！」

そう言って俺はエクスカリバーを出し、その場で構えると、辺りに16個のエレメントが出現、火が4水が7光が5である

龍牙
「っ!?」

一瞬わずかに増大した殺気を感じ取り横に回避する、足の裏すれすれを鋭利な何かが通り過ぎていき、俺の目の前に姿を現す、見ただけでビビりあがりそうになるほどの、貫禄に冷や汗をかきつつ、同時にこうも思った『俺に勝てるのか・・・』と、ジョーとの戦いで殺気を当てられるのには慣れたつもりだったが全然だったようだ、こうも全身にまるでナイフを突き刺されたかのような殺気を感じると相手は一切の手加減なく確実に殺しに来ていることが嫌でも分かった

テオ
「来たか、候補！だが俺はあいつがなんと言おうがお前が俺たちの王になるのは認めない！だから！俺が今此処で歴代の王（クズ）と同じく灰にしてくれる！」

テオ
「グルアアアアッ!!!」
此処に炎王との戦いが幕を開けた

1話　中編

テオ
「グルアアアアッ!!!」

耳の鼓膜が破裂するかと思う程の咆哮を放ち、こちらにノーモーション突進を仕掛けてくるがそこまで速くない突進を横に回避するも・・・・

龍牙
「グッ!」バシッ
避けた瞬間背中に結構な衝撃が走った、おそらく尻尾を叩きつけたのだろう、軽く吹き飛ばされるも受け身をとり、テオを見るも俺の目の前には既に赤い粉が舞っていた、いや目の前ではなく囲むように舞っている

龍牙
「ヤベッ!」

すぐさま上空へシフトするも移動した瞬間今度は腹部に強烈な衝撃が来た

龍牙
「グフッ!(くっ!こいつ、俺の移動先を完全に把握してやがる!これじゃエレメントスターターが出来ない!)」
シフトした先を見計らってかテオの翼が腹にダイレクトに当り空中に投げ出される、がすぐに体制を整え、豪腕で追撃しようとしている奴に小麦粉もどきで作った煙玉を投げ、テオの目の前で破裂させる
テオ
「!?」
流石のテオも驚いたようでほんの一瞬動きが止まったその時にペ

ルソナをだし、アギダインで発火させる、粉に引火していきその場で大爆発を引き起こす

龍牙

「粉塵爆発ってな、大した効果はなくても気が引けるならもうけもんよ！アベル、ランダマイザー！さらにヒートライザー！そして火のエレメントスターター！」

背後からアベルを召喚し、弱体化させ、更に自身を強化し、火耐性を底上げし黒煙の中に向かって４つの水のエレメントで強化したブフダインを放つ、無数の巨大な氷の棘が煙の中に消えて聞く・・・・・が

ジュウウウゥゥ!!!

けたたましい音を出しながら蒸発する音が聞こえる、風圧と共に辺りの黒煙と白煙がかき消え、その場が確認できるようになったが、そこに居たのは身体中から熱気と炎を放ち飛んでくる氷を瞬時に蒸発させているテオの姿だった

龍牙

「ウソだろ・・・弱体化させたのにかすり傷すらねぇのかよ・・・」

テオ

「ハッ！この程度の弱体化で傷つくほどやわな体はしていない！しかし今回の候補の実力はよ、正直期待外れだな、力もなく他者を騙すしかできねぇ貴様には王と言うこの立場は身が重かったようだな！」

騙す？何のことだ俺はそんな事をしてきた覚えはない、地面に降り立ち、テオに向かって意見する

龍牙

「いったい何の話だ！俺は誰かを騙した覚えはないぞ！」

テオ

「嘘を言え！お前があのキリンの二頭を誑かしているのは知っているぞ！」

俺が親父と母さんを誑かしているって・・・

龍牙

「ざっけんな！俺にとってあの二人は恩人の様な人だ、そんな二人を誑かしているだと！」
流石の俺でもあの二人には感謝している、それを何も知らない奴にどうこう言ってほしくない
龍牙
「此処からは本気（ガチ）で行かせてもらう！」

ｓｉｄｅナナ
ど、どうもナナです・・・・ご、ごめんなさい・・・わ、私昔から見た目とは裏腹に気弱なので・・・いつも兄さまに守ってもらうばかりでした、だから今回〝また〟候補が来ると聞いて怖くてたまらなかった、だから兄さまは私を守る為に今も候補と戦っている、私はその姿を人化して見ているしかできません、ですが本当に彼は兄さまの言っていた通りの人なのかな？キリンの二人の話じゃ王やその候補をひどく憎んで居たあのジョーとも仲良くしていると言う、その彼は今もなお、兄さまに攻撃を仕掛けるがまともに攻撃が当たっていない、当たったとしてもかすり傷程度なのに彼は諦めない・・なんでそこまで・・
テオ
「何で諦めねぇ・・・お前はもうズタボロでフラフラで勝機なんてものは欠片もないはずなのに・・・そうまでして王になりたいのか！そこまでして俺らを従わせたいか！あぁ!?答えろ！」
兄さま・・・貴方はなんでそんなになっても・・・
龍牙
「俺はな・・・正直王なんてどうでもいいし・・・・なるつもりもない、俺、お前と戦って分かったんだよお前も何か守りたいもんがあるんだって・・・だけどな・・・・だけどな！あの二人には数え切れない程の恩がたくさんあるだよ！そんな人たちを騙す程、薄情者に俺は

なった覚えはねぇんだよ!?俺はどんなに傷ついても構わない・・・でもな!テメェは一発ぶん殴んねぇと気が済まねぇんだよ!!!」

彼は背後から何かを出しながら再び兄さまにシフトブレイクを仕掛ける

テオ

「・・・・ッ!?・・・・ な、何度やっても変わらねぇ!とっととくたばれや!」

っ!?・・あの兄さまが僅かにだけど動揺してる、それでも兄さまには勝てない、今度もまた弾かれて終わる、それが貴方の最後・・・・なんで

ナナ

「嘘・・・・」

---

sideテオ

何なんだよこいつ!焼いても殴っても薙ぎ払っても、なんで立ち上がって来る!そこまでして俺に認めてもらいたいのかよ!　俺は自分でも気づかないうちに奴に向けて言葉を発していた

テオ

「何で諦めねぇ・・・お前はもうズタボロでフラフラで勝機なんてものは欠片もないはずなのに・・・そうまでして王になりたいのか!そこまでして俺らを従わせたいか!あぁ!?答えろ!」

本当は違うってとっくに分かっているでも、それでも俺はこいつを消さなければならない、妹たちを守る為に他の龍達を守る為に、俺はこいつを殺そうとしているのになのに・・・なのになんでこいつは、そんな優しい目を俺に向けるんだ!

龍牙

「俺はな・・・正直王なんてどうでもいいし・・・なるつもりもない、俺、お前と戦って分かったんだお前も何か守りたいもんがあるんだって・・・だけどな・・・・だけどな!あの二人には数え切れない程の恩がたくさんあるだよ!そんな人たちを騙す程、薄情者に俺はなった覚えはねぇんだよ!?俺はどんなに傷ついても構わない・・・でもな!テメェは一発ぶん殴んねぇと気が済まねぇんだよ!!!」

テオ

「・・・・ッ!?・・・・な、何度やっても変わらねぇ!とっととくたばれや!」

あいつは俺に向かってまた手に持っている剣をこちらに投げてきた、何度も見てきたその技は初めから見切っていた、だから避けるのは容易いことなのに・・・

テオ

「オラァ!」

あいつをたたき落そうと剣を弾こうとした時だった

スカッ・・・

俺の拳は剣をとらえきれなかった・・・・・

龍牙

「こっちだ!」

俺が声の聞こえた方を見るとそこにはさっきとは装備が変わり軽装の鎧を纏った候補の姿があった

龍牙

「殺意なき信念を見せてやる!」

両手に持った双剣をクロスさせながら先程とは比べものにならない速さで闇の力を纏った双剣を俺に降り下ろした

『グランドクロス』

とてつもない闇と爆発で俺の体を蝕む余りの威力にふらつくも直ぐに体勢を整える、俺とてここで負けるわけには行かない、龍脈エネルギーを使用し俺の全身を燃え上がらせる！いや！このすべてを！灰と化してやる！全身の火炎エネルギーを口内に貯め、奴が煙の中から飛び出して来たこの瞬間に飛びあがりブレスを地面に叩き付ける！

『ジハード』

俺には効かないが、奴には溜まったものではないだろう何しろこのフィールド全てを焼き付くすブレスなのだから、俺の真下にいたんだ、奴ももうおしまいだろう

『油断したな』

ハッとしたときには遅かった、空に居たはずの俺は血だらけで地面に落ちそうになる、辛うじて地に足をつける事が出来たがもう反撃は出来ないだろう、なぜかって？そりゃ目の前に双剣を降り下ろそうとしている奴がいるんだ、流石の俺でも咄嗟にこれは回避出来ない

候補の一撃が俺の体に刻まれ、俺は倒れた

『天舞蓮華』

ｓｉｄｅ龍牙
あっぶね!!最後マジであぶね!あの時ジョブチェンジして良かった!いやぁジョブチェンジの事すっかり忘れてたわ、だってむちゃくちゃ強いんよ、スーパーノヴァ連発してくるし、攻撃先読みしてくるし、地面からの噴火で吹っ飛ばされるし、なんだよ炎のトライアングルってしかも咆哮で内部全て焼却するし、あんなのを前回転で回避するハンターはやはり化け物だ、と、兎に角テオを回復させるか、そう思い近付くも・・・・

ズサァァァ・・・

俺とテオの間に龍化したナナが割って入って来た
ナナ
「もう兄さまは戦えない・・・これ以上兄さまに手を出せば私が許さない!」
俺はペルソナを出しテオにメシアライザーを放つ、すると怪我は一瞬にして完治する
テオ
「・・・なんでトドメを刺さなかった」

龍牙
「刺す必要なんてないね、母さんからは何とかしろって言われただけだしな、それにもしトドメ刺したらナナが悲しむだろ?」
テオ
「・・・・・フッ・・俺の負けだな、確かにお前は今までの奴とは違うみたいだな、いいだろう認めてやるよ王としてな」
龍牙
「だから俺はそんなのにならないって!王って器でもないし、それよりも俺はまだ「トアのところか?」・・・そうだけど」
テオ

「その必要はねぇーよ、俺が良いって言ったんだあいつとはやり合う必要はない、ナナも文句はない、だけどまあ顔合わせくらいはしておいてもいいだろう、ついでだ俺らも一緒に行く」

いやナナにも聞けよ、いやまぁ戦わないで済むのは正直ありがたい

龍牙

「それはうれしいが大丈夫か？回復したとは言えまだ本調子じゃないだろ」

ナナ

「そうだよ兄さま、顔合わせなら今からじゃなくても・・」

そんな俺らを他所にテオは元気よく立ちあがりこちらを見ながら

テオ

「心配すんな、なんともないんだ」

そう言い残しテオはさっさと歩き始めるナナと俺は火山を立ち去ろうとした時・・

龍牙

「グッ！」シャッキン!!

俺の体から一本の刀が出てきた、それは闘王の刀だった

1話　後編

テオとの戦いになんとか勝利することができた俺だが突如目の前に黒く濁ったクリスタル状で闘王の刀が出てきた

龍牙

「闘王の刀が・・・なんで・・・」

テオ・ナナ

「・・・・・・」

テオとナナは突然の光景に唖然としたが二頭は何かを思いだし龍人化して俺の側に駆け寄り俺の肩を思いきり掴んできた

テオ

「お前!ここに来てから何年経った!?」

テオは俺の肩をつかみ、声を荒げながら問い掛けてきたよくわからなかったが俺はその問に大体千年位と言ったら二頭は何か焦った感じで

ナナ

「兄さま流石に今はヤバイんじゃや!」

テオ

「ヤバイなんてもンじゃやねぇーぞ!?おい!お前まだ戦えるか!」

龍牙

「一体なんの事だ!何が起きるんだ!」

二人の慌てぶりからただならぬモノだと言うことは瞬時に理解した、そしてテオは冷や汗をかきながらこう言った・・「歴代王が・・・・来る・・」と

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ｓｉｄｅテオ

俺は今焦っている、何故か?当たり前だ!歴代王の中でも闘王は俺の知っている王の中でも超越した剣技とスピードを併せ持つ以前

戦った時は俺とナナとトアの全員で本気であたって何とか抑えることができた相手、しかし今まともに戦えるのはナナぐらい、俺も候補も傷は治っているが体力がもつかどうか分からない、くっ！せめてトアがいてくれればまだ可能背は残ってるが・・・とにかくたられば の事を考えても仕方がない、やるしかない

テオ
「いいか候補、闘王のスピードは全てを超越している。そのスピードから繰り出される居合いはほぼ一撃、当たればまず生きていられないだろう、見た目で侮るなよ！」

龍牙
「分かってる、つか一撃って・・でもなんで今更闘王が出てきたんだよ！」

そうか、そこからか、だが今話してる暇はないだから簡潔に一言で伝える

テオ
「これはお前が真の王に成るための試練だ！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

その言葉と共に刀は上空に上がると黒い風が刀を覆い始め、３メートル程の大きさになると中心から弾け、何か鉄の塊の様なものが地上に砂煙を上げながら落ちてきた、砂煙が晴れるとそこには見るからに重そうな全身を覆う鎧を纏い腰に刀を携えた闘王の姿があった

テオ
「いいか、闘王はとにかく素早く技の威力が高い、お前はペルソナを使ってまずは王を弱体化させせろ、気を一瞬でも抜いてみろマジで死ぬぞ」

龍牙
「ああ・・・」
テオ
「なんだ?震えてるぞ?まさかびびってんのか?」
龍牙
「チッゲーよ!ただの武者震いだ!そう言うお前こそ腰が引けてるぞ、びびってんだろ」
テオ
「はっ!バカにすんなよ、これはあれだ武者震いだ」

なんて軽口を叩くも先の戦いで疲弊しているのは俺もテオも同じ、ここにナナの力を加えても勝てるかどうか・・・正直わからない、だが負けられない、俺が決意を抱き顔を闘王に向ける、
闘王は軽く頷き、腰を低く落とし早速居合いの構えをとる、俺もまた村正を構え腰を低くする、魔人の脚力ならばなかなかの威力になるだろう、そしてナナを含む三人もいつでも動ける状態にある、そして始めに動き出したのは龍牙であった
ダッ!
走りながら虹のエレメントを闇のエレメントに変換し再び『グランドクロス』を放つ
龍牙
「フンッ!・・・・なっ!」ガキン!
渾身の技を闘王に放つも左手のみで防ぐ、多少後ずさるも、龍牙の腕を掴みそのまま振り回し地面に叩きつけようとするも青い鱗粉と炎が一直線に迫って来る闘王は龍牙ごと凪ぎ払おうとするも頭上からの火球が手に当り放り、投げ出されるも上空で体制を整えアベルを出し着地する
龍牙
「あぶなねぇ!」
テオ

「それはこっちのセリフだ！ボケ！死にてぇのか！とっとと弱体化させろや！」
龍牙
「わかってらぁ！ランダマイザ！」
三色の玉が闘王に当たる始めは困惑していたがすぐに体の異変に気付いた、こちらに縮地から居合いを仕掛けてくるがギリギリで避ける事ができた、それでもギリギリだった、その間にナナは蹴りやパンチ、翼、尻尾を使い鱗粉を振り撒きながら接近攻撃を行い、時に周りの蒼炎を使い火炎攻撃を行う
ナナ
「やあ！」
蒼炎をくぐり抜けナナの渾身のボディブローが直撃する、衝撃波を辺りに放つ程の威力にもかかわらず、闘王は動じずお返しと言わんばかりにナナの腹部に強烈なパンチが捩じ込まれる
ナナ
「カハッ！」
その一撃で吐血する、腹部にねじ込まれた拳を振り抜くと同時に壁際まで吹き飛ばされる
テオ
「ナナ!!」
龍牙
「バカ！目を離すな！」
テオ
「ハッ！しまった！」
だが既に闘王は上空にいたテオの上空に右足を上げた状態でおり、その右足をテオの左肩に振り降ろす、テオはそのまま地面に叩きつけられる
龍牙
「まだだ！ケアルガ！」
すかさずハートのエレメントを使い、回復を二人にかける、遠目だか起き上がっているのを確認し前線に復帰するまでの時間を稼ぐ

龍牙
「マハラギダイン！」
闘王に複数の爆発が当たる周囲に撒いてあるナナの鱗粉に着火し闘王に蒼炎の爆風ダメージを与える至近距離でモロに食らった為か鎧の一部が欠けている、そこに目掛けて村正を投げ突き刺さると同じにシフトし捩じ込むと堪らず膝を付くそこにアベルでブレイブザッパーを叩き込む・・・が
龍牙
「グアアア!!」
突如体を一刀両断された感触と痛みが全身に響き思わず膝を付く
龍牙
「い、一体何が・・・起きて・・・」
顔を上げると目の前にいたアベルの下半身と上半身が分裂して消えていった
龍牙
「はぁ・・・・はぁ・・ペルソナ・・ブレイクだと」
そう龍牙はペルソナを破壊された、心の塊とも言えるペルソナそれを破壊されれば精神と体に直にダメージが入るしかも特大ダメージそれをまともに受けたのだしばらくは動けない
龍牙
「くっそがぁ！」
村正を杖代わりに無理やり立ち上がるも目の前には既に闘王がおり此方に刀の先端を向けていた
闘王
「・・・・・・」
龍牙
「なんだよ・・・・ まだ終わってないぞ・・・・ 精神がやられただけだ時期

に戻る・・・・」

闘王はゆっくりと刀を振り上げる、まるでこれで終わりだとでも言いたげに

龍牙

「でもよ、俺の精神がどうこうよりさ・・・・まず自分の心配したら？」

闘王

「ッ!?」

闘王が咄嗟に上を見るとテオとナナが体中に鱗粉を纏わせながら龍化し、闘王と俺の居る場所に向かっている、闘王は瞬時にこの場を離れようとするが、「行かせねーよ！兄妹の絆見したれ！」とアベルが羽交い締めにし龍牙は二本の村正を闘王の足の甲に突き刺し更にバックステップからのファイガを胸部にぶち当て、それと同じにナナが着地その高熱の衝撃波を闘王にぶつけその上に居るテオがスーパーノヴァを闘王の目の前で爆発させる、勿論俺にも衝撃は来るがダメージは余りない・・・・火炎耐性があって良かった・・兎も角これだけの技を喰らったんだこれで終わりにしてほしい、闘王から距離をとり煙が晴れるのを待つ、やがて煙が晴れるとボロボロになった鎧のうえ膝をつき刀で体を支えている闘王の姿がある

闘王

『よもや此処までとは、まだまだ荒削りながらも諦めないその精神、これまでの候補とは異なる存在よ、汝、王の力如何様に使う？』

龍牙

「生憎俺は王とかそんなのに今はあんまし興味ない、でも、家族や周りの全部とは言わないけど、俺の手の届く範囲の仲間を守る為に使う、闘王からしたらまだまだだろうけど、それが俺のモットーなんだよ」

ガシャガシャと音を立てて立ち上がる闘王、その雰囲気は何処か満足感が溢れていた

闘王

『認めよう、汝を王と認めよう、しかし鍛練を怠るべからず、他の龍や

王達は今の間まではその体に触れる事すら出来ない、それを忘れてはならない』

そう言い闘王は自らの刀を俺に渡してきた、それを受け取ると闘王は光となって刀に吸い込まれて行った、その刀身は以前の輝きとはまた違った輝きをしていた、刀をしまいその場にテオとナナと三人で座り込むが・・・

龍牙
「アッツ!!」ジュー
よくよく考えれば
ここは火山でマグマ溢れる所だった、龍化しているせいかテオとナナは笑いながら余裕で寛いでいた

龍牙
「クッソー!・」
火山には似合わない笑い声が暫く響き渡った
ーーーーーーーーーーーーーーーー

極海

俺たちは現在極海にいる、テオとナナはホットドリンクを飲んでもメチャクチャ寒そうにしてたが、目的は一つトア・テスカトラに会いに行くためだ

龍牙
「本当にこの先に居るのか?・大分奥まで来たけどさ」

テオ
「だだだ大丈夫のはははずだ」ブルブル
メチャクチャ震えてる、やっぱ普段の生活環境が違うからか、氷結弱点だからか、さっきまでの動きが嘘みたいに違う、流石にこのままにはさせておけない為に二人に羽織るものを着せる

龍牙

「これでも着なよ」
耐寒用のコートを二人に羽織らせる、これで少しはましになるだろう
ナナ
「あ、ありがとう・・暖かいよ」
テオ
「す、すまんな」
龍牙
「まさかホットドリンクを飲んでも、そこまで寒さを感じるとはな、やっぱ生活環境が違うからか、ここまで耐性がないとはな」
コートを着せてもまだ震えが止まらない二人に、違和感を感じる、いくら寒さに耐性がないからと言ってここまでなるか?仮にも古龍だ、龍脈エネルギーを熱エネルギーに変換して体温を確保することは造作もなさそうだが・・・・
テオ
「し、仕方ないだろ、此処等一帯の龍脈はトアが管理してんだ、俺らが勝手に弄ればそれこそ龍脈が乱れるからな、しかしトアの奴この吹雪どうにか出来ないのか」

ナナ
「し、しょうがないよ、トアも候補様が来るしか聞いてないんだから、私達が居るなんて、わ、わからないよ」
古龍にもいろいろな事情があるんだな、どうやら俺はまだまだ何も知らないようだ、彼らの事を、この世界の事を、そんなことを考えている内にどうやら最奥までたどり着いたらしい
龍牙
「着いたか・・・殺気は感じられない、でも視線は感じる」
ナナ

「龍脈に動きがある、私達が居るから攻撃はしてこないと思うけど、気をつけてね」

徐々に辺りの吹雪が収まってくると、奥から凍王龍　トア・テスカトラが姿を現した、俺にだけ鋭い殺気が浴びせられるがテオが前に出る

トア
『兄さんなんでそんなのと居るの？そいつは次の候補なんでしょ』

テオ
「ああ、そうだ、だがこいつは他の奴等とは違った直接戦った俺だからわかる、こいつは敵にとどめも指せない甘ちゃんだ、だから俺たちがこいつを本当の王に仕上げるんだ」

トア
『出来っこない、今までの王達もそうだった口では何とでも言えるよ、そのたんびに犠牲になるのはうち達女なんだよ、そいつの欲望の捌け口にされるのはさ』

テオ
「確かに・・そうだったな、俺たちはずっとそれに耐え続けて来た、だからこそ今度は俺たちがこいつを本当の王にする必要がある、どうあがこうが俺らに王が必要なのは変わらない、それはお前もわかっているだろう」

トア
『それは・・・そうだけど！それでも、うちはもう耐えられないの！それに候補が来るのに反対してたのは兄さんもそうだったじゃない！』
　それは心叫びだった、俺にはそれがどれだけ苦しいものだったのかは分からない、でもそれでもこれまでの王が腐り果てていたのかはわかる、今の俺が出来ることは彼女の怒り、苦しみその他の負の感情を

受け入れてやることだろう
龍牙
「なら、それを俺にぶつければいい、俺はなにもしない、殺したいなら、すればいい俺はそれすらも受け入れよう、トアの感情を俺にぶつけろ！受け止めてやる！そしてトアが俺を認めてくれるのなら、俺は全身全霊をかけてトアが、龍達が健やかに過ごせる世界をどれだけの時間が掛かっても見せてやる、だが俺もそう簡単に死んでやれない、防御くらいはさせてもらうぞ」
トア
『ふん！御大層な事を言うね！出来もしないことを！うちは知ってるよ、そんなことを言う奴は大抵ホラ吹き野郎ばかりさ、兄さんを倒したからって調子乗ってるのならあんたの下らない理想ごと殺してあげるよ！』

その言葉を最後にトアは俺に飛びかかってきた、俺は腕をクロスさせタックルをしのぐ、数メートル弾かれるがしっかりと両足で立つ、防御を解除するも正面から幾多のつららが飛んでくる、いや正面からだけではなく俺を囲むかのように飛ばしてくるそれを致命傷に至りそうな物だけを弾いていく
テオ
「!?・・・そこから離れろ!!」

テオが俺にそう叫ぶ、だが時すでに遅しとはこの事を言うのだろう俺は三角形の氷壁に包まれていた
龍牙
「くっ！」

恐らく来るであろう下からの攻撃に身を守るがその認識は甘かった、トアの咆哮が起きた瞬間俺の全身を、いや囲まれた全体を氷が包み込んでいた

龍牙
「(ま、まずい！息が！アベル!!インフェルノ！)」
ペルソナを召喚し火炎魔法を自身に放つ、熱線が俺ごと氷を瞬時に溶かし、囲いから抜け出す、勿論俺自身にもダメージが残るがそんなのは気にしてられない、彼女の怒りはこの程度で収まる筈がないのだから、極海を根城にして龍脈の管理者だけにあって氷を使った技に長けている、気づけば辺りはまた吹雪がふきはじめていた、いくらホットドリンクを飲んでもこれではいずれ動けなくなるのは目に見えていた
龍牙
「(わかってはいたけど、流石に激しいな、そろそろホットドリンクを効果も切れそうだ隙を見て飲まないと)」
そう思ってもがそう簡単にやらせてくれないのがトアだ、彼女はわかっているんだ、俺がアイテムを使って体温を維持しているの、それゆえにどんどんトアの攻撃は休まるどころが、加速していっている、既に身体中傷だらけで、凍傷もあちらこちら見えている
龍牙
「はぁ・・・・はぁ・・・・」
トア
『お前はうちを舐めてるの!?なんで攻撃してこないの！』
龍牙
「言ったろ・・はぁ・・なにもしないって」
トア
『ふざけないで！そんなので勝ったってなんの意味もないの！お前に完全な敗北を与えないと意味もないの！今までずっとずっと！兄さんに守られてばっかりで！何もできなくて、奪われるばかりで！やっと力つけて管理者にも選ばれたのに！これじゃやってることあいつらと同じじゃないの!?』

そうか・・トアは自分が歴代の王と同じ事をしているのようで嫌だったのか、だから反撃しない俺に苛立ちを覚えた・・・・どうやら俺はまだどこか彼女達モンスターを『モンスターハンター』のモンスターと同じように見ていたようだ、何が受け入れよう、だ　まるで理解していないのに知ったようにしてさ、ここはゲームなんかじゃないんだ、それぞれが心を持っている、うれしいならうれしい、悲しいなら悲しい、それが当たり前なんだ!それなのに俺はゲームと同じように思ってた

龍牙
「そうか・・トアは優しい子なんだな」

トア
『な、なんなの・・一体!うちが優しい?なに言ってるの?』

龍牙
「例え候補であっても、同じ事をしていいなんて君は思えなかったんだろ」

トア
『はぁ?なに言ってるの?そんなことをお前になんて思うわけないじゃん』

龍牙
「ならそれでも構わない、それでも俺はそう思っているだから、ひとつ訂正させてくれ、さっき手は出さないって言ったよな、これからは真剣に相手する、と、言っても俺ももう体がもたない次の一撃で終わらせよ」

トア
『・・・・いいよ、次で殺してあげるよ』

辺りの吹雪がトアの真上を中心に集まり巨大な氷塊を形成していく、当たれば挽き肉は間違いないだろうだからこそ俺はそれを迎え撃つ、右手に黒服の女性の絵が書かれたカードを持ち掲げると俺の服装が忍者から絵の女性と同じになる
『ティファ・ロックハート』（ＡＣＣｖｅｒ）
所謂アルティメットヒーローだ、本来ならそのキャラを使える物だがここでは違う所が二つある一つは服装だけが同じになる二つ目はｖｅｒ∞の必殺技が使える事だろう
ただこのままでは力負けするのでバフをかける

龍牙
「この一撃に全てをかける!!」
『ファイナルヘヴンｖｅｒ∞』

トア
『これで終わり!!』

【アイスメテオ】

自らの右手に力を溜める、向こうは既に巨大な氷塊を打ち出している、とてつもない速さだ、直ぐにでも到達するだろうが俺はその氷塊に光を放つ右の拳を叩き付ける
龍牙
「オオオオォォォ!!!」
拳が氷塊に当たると俺を中心に地面に亀裂が走り、腕から血が吹き出す
龍牙
「グッ!!」
だがお構いなしに俺は更に力を入れ、アベルも召喚する
龍牙

「チャージ!・ゴットハンド!・」
アベルの右手に金色のオーラが纏われ、それを氷塊に叩き付ける、それでも氷塊を破壊するには至らない
グッ!これでも破壊出来ないのか!?諦めそうになった時だった
テオ・ナナ
「「はぁ!!」」
氷塊がその二つの声によって砕かれた
テオ・ナナ
「「行け!!（行って!!）」」
テオとナナだった、二人の一撃によって氷塊は破壊され道が開かれた、二人に感謝をしつつトアの元に飛び出す
トア
『!!・・・そんな!?』
突然飛び出してきた俺にトアは後ずさる、その僅かな隙を逃さず、前足をくぐり抜け腹部に左のストレートを叩き込む
トア
『っ!!』
たった一撃されど一撃、俺の思いはきちんと届いただろうか・・・・
薄れ行く意識の中でそう思った
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ｓｉｄｅトア
うちは混乱していた、理由は言わずもがなこの目の前で倒れている男だ、なんでこいつは最後、うちを殴らなかったのか分からない、あ

の瞬間うちはお腹に一撃貰うと思ったでもいつまで経っても痛みは来なかった、触れられた感触はあったのに、なんでそこで止めたのか・・・・

テオ
「だから言っただろ、そいつはとどめも指せない甘ちゃんだって」

トア
『兄さん・・・』

テオ
「俺だって完全に信じた訳じゃない、でも賭けて見たくなった、今はそれで良いじゃないか、こいつが道半ばで死ぬ奴ならその程度の奴だ、それでもまだ納得出来ないか?」
兄さんがそこまで言うなんて・・・・はぁ・・仕方ないなぁ今はそれでいいよ、だから・・・・

トア
「自分で言った事は守ってよ?」
彼にホットドリンクを飲ませながらそう言うのだった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

数日後
龍牙
「で、なんで幼女神がここに?（ちょっと成長してる・・・・でもまだロリ）つか来れるのかよ」
ロリ神
「はい、来れますよ」
テオ三兄妹と闘王との戦いから数日後のある日何故がかロリ神がいた、なんで来たのか聞くと、俺が正式に王になったからその祝いに来たらしい

龍牙
「いや確かに闘王は認めるって言ったけど普通それ全員に認めて貰わないとダメなヤツじゃないの？」

ロリはチッチッチと指を横に振り（闘王は私が頼んで一番手にしてもらって、彼が勝ったら王として認めてってお願いしていたのだよ！）とドヤ顔で言ってきた

龍牙
「お前の仕業かい！・・・いやもういいわ、俺が疲れる、で祝いって言っても何？なんかくれんの？」

ロリ神
「はい、貴方の生前大好きだったゲームの世界を神器として貴方に宿せたいと思います！」

開いた口が塞がらないとはこの事なのだろうな、ゲームの世界を・・・何だって？おいどん耳が遠くなったみたいだ、もう一度確認しよう

龍牙
「あぁと、何くれるって？」

ロリ神
「だ・か・らゲームの世界を神器として貴方にプレゼントしますって言っています！」

・・・・・スケールのでかさに思考が追いつけない

龍牙
「世界を神器として宿せるって・・・因みにどんなやつ？」

ロリ神はムムムと頭を捻るとハッ！としてこう言って来た

ロリ神
「ＦＬＯＷＥＲ　ＫＮＩＧＨＴ　ＧＩＲＬの世界です！」（＊、・ω・）ゞ

エ○ゲーじゃねーか!?なにやってんの！なんでそれチョイスしたの！もっと他にあっただろうが！ス○ブラとかテ○ルズとか！ドラ○エとか！俺も男だからそう言うのに興味はあるよ！あるけどももう少し考えてよ！

龍牙
「な、なあロリ神？他には何かないの？」

ロリ神
「無い！というかもうやってます、なので変更なっしーでーす！」

即答でかつとんでもないこと仕出かしてくれたよこのロリは・・・あ～これ母さんに何て言えばいいか・・・・因みにこの事を説明したところ（あ～なんだ一人じゃやりにくいもんな！）と返答に困るような返事をされた、解せぬ

2話

どうも、龍牙です、前回からめちゃくちゃ時が経ちました、どれくらいかというと３０００年くらい経ちました、今日までにやった事を簡潔に言うと、幼女神からもらった神器【スプリングガーデン】これをマスターする事なんだが・・以外も簡単にマスター・・　禁（バランス・ブレイカー）　手に到りましてね拍子抜けしたね、まぁざっと説明するとまずは花騎士の召喚、次に彼女らの武器、スキルを使え、更にその世界に行くこともできる（その世界の１日は現実で１２時間）と言う物で禁手と言ってもゲーム内感覚で言えばスキルレベル＆ａｍｐ；装備スロットＡＬＬＭＡＸに最高レベルが５００になって、★１から５までのキャラが全員が開花昇華しているって感じ、でもね・・だからって毎日仲間の古龍と花騎士を同時に相手って・・・俺に死ねと言いたいんですかね貴方達・・・既に花騎士の２パーティー分の強さが古龍一頭と大差無くなってそれを古龍と一緒に相手って・・・俺これでも一応王様だよね？時より分からなくなる、むしろまだ仲間になってない古龍達と戦っている方がましだって思えてきたときは例え死にかけても相手の古龍の攻撃が優しく感じてしまい嬉しさで泣きそうになった〈決してＭではない！〉それに歴代王の試練もあれからちょくちょく始まり今では後、鬼王、伏龍王、夜叉王の３人にまでなっただけど一つ文句を言いたい・・・人が便所で用を足してる時に突然始めんじゃねぇよ！よりによって腹痛の時に始めやがって思わず修羅王に説教したよ！・・・・まぁいいわ、後はペルソナの強化に武器作成なんかをしたんだがそんな事よりも・・・自分の事だが俺は確かに魔人にしてくれと言ったさ・・・でもね・・・・・

誰が龍魔人にしろと言ったよ！

例の修羅王の戦いの時に発覚したよ！あと少しで負けるって思った時に俺の体が急に燃え始めて瞬くに巨大な火柱になったよ、その中でどんどん人の姿から龍の姿になっていってさ、完全に龍になった時の姿がさ帝征龍　グァンゾルムだったよ・・・この話はもういい、先の事なんてただ勝ったってだけだから、そんな事よりも誰でもい

い・・・

　龍牙

「HA☆NA☆SE!!」

助けて・・・

絶賛花騎士（極みヤンデレ）2人＋ジンオウガ(極み状態)、ナルガクルガ(極み状態)に捕まっております因みにこのジンオウガとナルガクルガ・・・メスです・・・ってそんなことはどうでもいい、兎に角なんでこうなったのか説明しよう

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

あれは今から三時間前に遡る、今日の俺は完全なオフの日なのだ、だから今日は人間界に行こうと思っていざ行こうと部屋を出たら目の前にジンオウガ（人状態）がいたのだ

　龍牙

「お、ジンどした?こんな処に」

　ジンオウガ

「いや、別に・・・なんと言うか・・・」

　珍しく歯切れの悪いジン、言いたいことははっきり言うタイプなのだがどうしたのだろうか、遊んで貰いたいのだろうか少しからかって

みる

龍牙

「なんだ?また散歩にでも連れてって貰いたいのか?」

ジンオウガ

「散歩!?私はイヌタデではない!!ただ久々に王と・・・共に何処かに行きたいと、思っただけだ」

あ～そゆこと、要するに・・・・

龍牙

「寂しかったのな（それ散歩じゃね?）」

なんとか心の声を抑え、そう言うとジンは頬が赤くさせながら目を逸らした、確かにここ最近忙しくて仲間達とコミュニケーションを取ってなかったな、良い機会と思いジンと出かけよう

龍牙

「ならちょうどいいや、今悪魔達が戦争してるし、迂闊に外に行けねーから、人間界に行こうぜ、たまにはのんびりするのも悪くないだろうしさ、どうよ?」

ジンオウガ

「まぁ、王が良いなら・・・行こう」

と、ジンが先行した瞬間俺の右手がものすごい勢いで引っ張られ思わず声が出る、が流石と言うべきかジンは俺の左手を取った

ジンオウガ

「いくら王の神器とは言え、勝手に出てきて王を連れていこうとはどういうつもりだ?

スズラン」

そう俺の右手を引っ張たのは俺の神器であり花騎士の中でも特にヤバイスズランである

スズラン

「・・・・団長さん何処かにいくの？だったら私と行きま「何処までもふざけた女だ・・・」・・・・チッ・・あんな野良イ・・・女なんてほっといてね！団長さん！」ハイライトオフ

クソッ！ハイライトが早々仕事放棄しやがッた！止めろ！そんな目で俺を見るな！後舌打ちしてんじゃねぇーよ!!ヤ、ヤベェよ・・左手がビリビリするんですけど、左側見たく無いんだけど！しかもなんか痛いし爪食い込んでるし！こ、これは雷撃と物理無効付けておいた方がいいかな・・・あっ・・無効系、火炎と氷結しか無かった、俺雷撃弱点なんだけど・・・・／（＾ｏ＾）／ナンテコッタイ！

ジンオウガ（龍人化）

「・・・・調子に乗るなよ？小娘が・・・乳だけが取り柄のお前など俺の前では赤子も等しい、消されたく無いなら王からその薄汚い手を放せ」

スズラン

「チッ・・・あら、まだ居たんですか、躾のなってない野良犬が・・・・さっさと犬小屋にでも帰りなさい」

ブチッ

何かが切れる音がしたような気がする・・気のせいだろう、うんきっとそうだ・・怒りで一人称が俺に戻っているなんてあるわけがない！と思いたい！

なんて現実逃避は止め目の前の極みになったジンオウガを見ると突然浮遊感が俺を襲う、この時二人は手を放していたためなんともなかったが首根っこを摘まれて居るためぐっと首が締まる・・・死ぬかと思ったがなんとか気道を確保しその相手を見ると龍人化したナ

ルガクルガだった
　ナルガは暫く移動し外にある庭の人目の付かない場所に着くと俺をいきなり押し倒した・・・・・・・えっ・・・・・

　ナルガクルガ
「王が他のメスと居るのを感じて文字通り飛んで来たよ、さぁ、今なら僕と二人きりで周りにだれもいないし邪魔もされない、だから・・・・ヤろ？」ハイライトオフ

・・・・・・忘れてた・・コイツもだった、しかもどっ直球で自分の欲望さらけ出しやがった!!
　龍牙
「ま、待て！ナルガ！早まるな‼・・・ぐあっ！」

　しかしナルガには俺の声が届かなかった、しかもご丁寧に手足に棘まで刺しやがった、このままじゃ流石にヤバい必死に抜こうとするが余程深く刺さったのかビクともしない
　ナルガクルガ
「駄目だよ、大人しくしてないと・・・・安心してよ直ぐに終わるから・・・」
　龍牙
「出来るかぁ!!んなことより早く退け！今ならまだ許す、これ以上するなら俺にも考えがあるぞ!!」

　それでも退かないナルガ、仕方ないと思い龍化しようとした、その時ナルガ目掛けて氷塊が飛んできた
　ラベンダー
「見張っておいて正解でした」
　影から現れたのは、やはりヤン・・・ラベンダーだった、彼女がナルガを引き付けている間に棘を抜こうとすると何故か手足が凍ってしまった・・・・あっ（察し）

ラベンダー
「団長さん、直ぐに終わるのでそこで待っていてくださいね♪」
こんな状況でなければ見惚れるほどの笑顔何だが、俺には悪魔が笑ったようにしか見えなかった・・しかもさっきの二人が俺の事を呼びながら向かってくる、しかしスズラン君はどうやってジンオウガのスピードに付いてきたのかな？
スズラン
「愛です!!」

しれっと心を読まないでほしい、しかしジンの落雷のおかげで氷が砕け、棘が緩くなったさっさと抜いておさらばしよう、そうしよう、しかし現実は非常である
ダキッ
・・・・・なにやら2つの極上のやわらかい何かが背中にある・・・
スズラン
「ふふ、何処に行くの？団長さん？」
お、俺は何も聞こえない
ダキッ
ラベンダー
「さぁ私といきましょう？」
・・・更に小型ながらしかっりとそのやわらかい感触が右腕に・・・
おおおお俺は突然耳が可笑しくなったんだ、きっと何かの聞き違いに決まってる
ダキッ　ダキッ
ナルガクルガ　　ジンオウガ
「僕を置いて行くの？」　「お、私では駄目なのか？」

上目遣いで左腕に抱くつくジンに真正面から抱き付くナルガ、普段ならば頭でも撫ででやろうかと言ってやりたいところだが、そんなふざけた事を言っている場合ではないので俺はこう叫ぶ

龍牙
「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ!!」
長くなってしまったが、これが今までに至る回想だ、だが神は俺を見捨ててなどいなかった！
テオ
「此処にいたか！龍牙！って何やってんだ？お前ら・・」
龍牙
「丁度いい所に来た！こいつら引きはがすのを手伝ってくれ！」
終始困惑状態のテオであったが何とか全員を引きはがす事に成功しテオに要件を確認する
テオ
「そうだった！今悪魔達が戦争してんのは知っているな、（コクリ）なら話は早い奴らの攻撃がここら一帯にまで被害がでてる、これはもう見過ごすわけにはいかん、それに二天龍も暴れ出してあいつ等だげじゃどうにもならなくなった、だから止めに行くぞ、ついて来い」
そう言い残し飛び立っていくテオ、俺は他の四人に、「んじゃ！」と言って翼と尻尾をだして、テオの後を追いかける！

ｓｉｄｅ　サーゼクス
なんてことだこのままでは三大勢力共に全滅してしまう！幸い他の勢力と手を組むことが出来た、だがそれでも疲弊しきっている我々だけではあの二天龍には遠く及ばないだろう
アザゼル
「どうすんだ！サーゼクス！このままじゃマジで全員お陀仏になるぞ！」
アザゼルがそう叫ぶが、混乱しているのはこちらも同じ、何度作戦を考えても先に見えるのは自分たちの詰みだけ

アザゼル
「サーゼクス!!」
サーゼクス
「分かっている！今考えているんだ！」
「ちげぇ！避けろ！」とアザゼルが言った、何だと思い前を向けば二天龍のブレスが迫ってきていた、この距離から魔法を放っても恐らく間に合わない！私は心の中で死を覚悟した、遠くからアザゼルとミカエルが叫んでいるが何を言っているかわからなかった、そして私は業火に飲み込まれた・・・

クオォォォオン!!!

なにかの咆哮が聞こえたかと思いきや私の横を何か湿ったモノが高速で横切っていった、とっさに目を閉じていたので開けてみると、なんとあの二天龍のブレスが真っ二つに裂けていた

「ご無事ですか！」とミカエルとアザゼルが寄って来るが二人の視線は私の背後に釘付けになっていた、何だと思い振り返るとそこには、まるで羽衣を纏っているかの様に見える見た目の風を全身に纏い浮いている龍とまさに猛獣と言っても過言ではない紅い龍に鋼の如き鱗を持った銀色に輝く龍そしてなによりその三体の龍よりも強い殺気をあふれ出している、前に伸び天に向かって伸びている角、その総身は天を向いて生え揃った鋭利な刃の如き”逆鱗”、そしてその逆鱗が重なり合って形成された”逆殻”に覆われた黒い龍そしてその前を歩く黒コートの人物の顔はフードに隠れて分からないが声からして男だろう
ドライグ・アルビオン
「お、お前は！」
とあからさまに動揺する赤龍帝と白龍皇、そんな彼らに臆することなく近ずく黒コートの男、二頭のもとに着くとなにやら顔を下げさせ話し込んでいる、その瞬間赤龍帝が真横に吹っ飛んでいった、白龍皇

はなんとなく冷や汗をかいているように見える、どことなく言い訳しているようにも見えるが・・・・

黒コートの男

「こんっの大馬鹿者がぁぁぁぁぁぁ!!」

の叫びと共に今度は白龍皇が奥に吹っ飛んでいった

ミカエル

「我々が苦戦したあの二天龍をたった一撃で・・・」

なにやら戦慄しているミカエルだが私にはどうしても悪さをした子供を叱る親にしか見えなかった・・・

---

side龍牙

全くふざけやがって、喧嘩してた理由がキノコタケノコどっちが美味しいとか、たまらずモンハナシャコの全力でドライグとアルビオンを殴った俺は悪くない、確かに某会社のクラッカーにキノコの形のチョコとクッキー生地にチョコをかけたタケノコっぽいチョコをあいつらに作って持って行ってやったけどな、損なくだらないことで喧嘩すんじゃねぇよ!まったく・・・因みに俺はタケノコ派な

龍牙

「でさぁアンタ等もさぁ、戦争すんのはお前らの勝手だけどさ、周りの事を考えやがれ!」

三人

「えぇ!?」

取り敢えず、俺の腹の虫が収まんないから

龍牙

「皆、殺すな、でも半殺し程度に全滅させろ」

天使の男

「ま、待ってください!確かに我々は戦争をしておりましたが、それももう終わります!何卒お慈悲を!」

なんか言ってるけど、駄目だね、俺だって怒ってるんだ、森の半数が焼け落ちたり、谷から瘴気が地上に溢れそうになったり他のモンスターが逃げて本来の場所とは違うとこに縄張り置いて争いが起きまくって鎮めるの大変だったんだぞ！

龍牙

「いやだね、それに俺前に一回お前らに手紙渡したよな、それでも続けてたんだ、文句言うなよ・・・・そうだなお前達の様に言えば第四の勢力、古龍勢力と言ったところかな、っでだ前に送った手紙に此方の被害状況を伝えたろ？それが更に拡大されてるわけよ、こっちがせっせと元に戻してんのにそれが一瞬でぱぁになってさ、もう我慢の限界なのよこっちはさ、だから慈悲はない、むしろ殺さないんだから、感謝されてもいいくらいだろ、てな訳だ・・・・やれ・・」

その後は俺も参加して三大勢力を殺さない程度にぶっ殺してストレス発散してきた、ただあの三人割と強かったな、悪魔の男は滅びの魔法かなを使って来たけど分類的に呪殺に入るからマカラカーンで反射余裕でしたアマツもテオもクシャルもアルバもどことなくスッキリしてたようだから結果オーライかね

でだ話が一気に飛ぶんだけど、時が進んで原作開始約１０年前になる、此処まで来ると原作の知識ってもう主人公やその周辺の人達くらいしか覚えてないのよね、まあそんな事はどうでもいいか、でもって俺は今困惑してるんだ何でかって？そりゃあ・・・・

龍牙

「何でまた子供に戻ってんだよぉぉぉ!!」

泣きたい、逃げたい、隠れたい、後の展開が分かる

完

3話

さて、どうも龍牙だ、初めに俺がショタに戻る前の事を簡潔に教えようと思う、前半の５００年は特に何もなかったが後半の５００年俺達は龍結晶の地ごと人間界に移住した、ぎりぎり日本の領土に入る位の場所に巨大な島として移動させた、まぁどうやってって思うだろう？祖龍に頼んだのよ、その代わり鉄拳の能力失ったけど・・まぁいいや、島には誰も入れないように結界もはったし無理に中から出ようとすれば元の場所に戻るようになってるから、龍が飛んで行っても必ず戻って来ることになるから心配はない

それから母さんが双子の女の子を出産したよ、元気のある原種の光（ヒカリ）と亜種の無口気味の雪音（ユキネ）の二人だ・・・・そしてなんだが実は島の浜辺で捨て子を拾った、名前は金髪ツインテの桃花、光と雪音が産まれて5、６年経って見つけたから、年は見た目的に5、6才かな、一つ年下の妹になる、正直妹とか初めてだったから、困惑したけど、そんなことはなかったよ、ただ皆同い年で仲がよろして良いんだが、部屋が一つしかないからって夜中に布団の中に全員で突撃してくるのは止めて、朝、母さんにしばかれるの俺なの・・・・しかし今思えば俺の許可がなければ入ることも出ることも出来ないあの島にどうやって流れ着いたのだろうか、謎だ

まぁ前置きはこのくらいでさぁ、あの後の事教えよう・・・、あの後、俺の姿を見た雌龍や一部の花騎士たちが一気にショタコンになって追いかけてきたのは軽いトラウマだ、しかも龍達・・あいつ等擬人化できるから、人の姿で追いかけてくるんだよ、あの数はシャレにならんし、捕まったら確実に食われる（性的に）とこだった・・・特にヤンデレ・・・あれはもはやホラーの領域だよ、逃げ切ったと思ったら、後ろの窓から『みぃ～つけた』ってハイライトの消えた顔を覗かせるのはトラウマものだと思う、あれは・・・正直軽くトラウマになっ

たのは言うまでもない、オス共はオス共で助けないで大爆笑してるし・・ま、まあこの話はもういいだろう、しかしやはり長い年月を生きてると約１０年って言うのはあっという間に過ぎる、まあやった事は大したことはない

人間の生活に近い事はしてきたが、いかんせん周りにいる人間は桃花の一人だけそろそろ光や雪音と一緒に学校にいかせたい、でもどうしようかと思ったが、なら本土に行けばいいじゃないか！って前向きな感じで親父たちと向かった、え？住民票とか金はどうするって？金ならある、住民票はちょっと洗脳して作らせた、龍脈便利・・で、土地やらなんやら買って家建てたらお隣さんが、この物語の主人公、兵藤　一誠宅だったのは吹いたね、これがあれかご都合主義という奴なのだろうか、兎に角なんやかんやあって、イッセーとは幼馴染のような関係で学校にもよく妹たちと一緒に行っているし、高校も駒王学園に入学した、イッセーの性格は・・・　まあ原作どうりとでも言っておこう、なんだよあの女性に対する執念は、特におっぱいについてはこれでもかって位に熱弁してくる・・・成績もあまりいいものでもなかったのにハーレムがどうこうって野郎三人猛勉強よ、俺？俺は前世の知識があったから、妹たちに教えながら復習程度にやったくらいよ・・・だから頼むイッセーよ俺におっぱいの話はしないでくれ、後妹達よ、絶対零度の視線を向けないでくれ、死にたくなる

あっあと黒猫拾いました、怪我してるのを俺が見つけて、家に連れて帰ったんだけどさ、まあ、この子が悪魔って親にバレるよね、でもだからって見捨てる事はしない、昔もよく怪我したモンスター助けたし母さんも親父もそれ知ってるし、妹たちも俺がそういう性格ってわかってるから、何も言わなかったしね、それ言ったら黒猫・・・　黒歌って言ってたっけが初めは凄く警戒してたけど何とか分かってもらえた、因みに俺以外が古龍って言ったら固まってたね、で俺がそれらを従えてる王様って言ったら気絶してたねワロス、さて過去話もこの程度でいいだろうしそろそろ話を進めるか

コラァ!!!待てぇこの変態三人組!!!

おっと、例の幼馴染がご到着の様だ、さて今日は見逃してやらない日だ、ドンマイ!イッセー強く生きろよ

～～～

一誠
「嫌に決まってんだろ！誰が好き好んで竹刀の中に飛び込むかよ！そんな事するわけないだろ！」

こいつ等ホントに親友かよ！秘蔵のＡＶ見せてやろうと思ったが、こんなこと言う奴らに見せるモノか!!!それからしばらく逃げると目の前に第二の爽やかイケメンで俺の幼馴染のリュウがいた

一誠
「リュウ！助けてくれ！」

女子
「龍ヶ崎君！そいつら捕まえて!!!」

リュウはなぜかため息を吐きこちらを向いたと思ったらニコッと笑った・・・あっこれはあかん奴や

一誠
「うおおおぉおぉ!!そこお退け!!イケメン！」

逃がしてくれないなら強硬突破だ！俺たちのジェットストリームアタックを受けて見よ!!

結果・・・・・

変態三人衆
「「「……」」」チーン

龍牙
「お前ら、ホントによくめげずにそこまでやれるよな……　つか教室まで運んでやったんだからなんか奢れ変態ども」

・・・・裏切り者ぉ……　ていうか木の枝でつつくな、つかどっから持ってきたんだよ・・・

放課後……

クッソォまだ叩かれたところが痛い、まあ早く帰って秘蔵のお宝でも見るとしますか、リュウの奴も今日は旧校舎に行くって言ったから居ないし、美少女三姉妹も友達と帰ったし二人もいないから一人か・・・・別に寂しくんなんてないし・・・・やめよう空しくなるだけだ……

女子
「あ、あの・・・　兵藤　一誠君ですか？」

ん？うおっ！目の前に美少女が！な、なんだ、俺になんだぁ！お、落ち着け、れ、れれれ冷静になるんだ

一誠
「お、おう、俺が一誠だけど、どうかしたのか？」

女子

「えぇと……　す、好きです！付き合ってください！」

・・・・ファ!!

イッセーside　out

～～～

「マジで!!・・・って、いやいや、別に妄想でも病気でもねぇーよ!ホントだって!ほら!」

そう言ってイッセーは俺に携帯で撮った写真を見せてきた、イッセーと一緒にいる少女、確かに話は本当みたいだ・・・

龍牙

「まじかよ、本当かよ・・・あいつ等にも見せたのか?」

一誠

「当たり前だろ、血涙流して喜んでくれたぜ、それに今度デートに行くんだ!だからさプランを一緒に考えてくれよ」

まあ、こいつが幸せそうなら別に気にしなくてもよさそうだな、写真の女も本当にうれしそうな顔をしている、これはガチの顔だな、なんでわかるかって家にもそんな顔をする娘が沢山いるからだよ!

龍牙

「分かったよ、幼馴染の頼みだ、プランなんていくらでも考えてやるよ、その代わり必ずものにしろよ?」

プランを考えるのは得意だ任せてもらおう、花騎士達とのデートをよくするから、注意点等を交えながら教えてあげよう・・・・いつか刺されそう

一誠

「ああ!任せてくれよ!」

だけど、この決断がイッセーを死なせてしまう原因になるなんて、この時の俺は思わなかった

一誠

「・・・・因みにその美人四姉妹って今から会えたりする？エロエロな診察とかしてくれる？」

前言撤回、一回死ね！

～～～

俺は自室のベットに転がりながらごろごろしていた

龍牙
「ふあぁ～、今頃イッセーは楽しくデートか、俺もそろそろ彼女とか作ってみようかな～」

まぁそんな事になったら、えらい事になるからしないけど

黒歌
「なら私がなってあげようかにゃん？」

・・・・・

龍牙
「お前なぁ、いつの間に俺の布団の中に？」

黒歌
「龍牙が部屋に入って来た時からいたにゃ」

まじか、俺少し寝てたからその間も居たって事だよな、全然気づかなかった・・・しかし語尾に『にゃ』ってつけてんのに気にしないのは慣れかな・・・・慣れだな・・・

龍牙
「まぁいいや、ちょっと散歩してくる、黒歌なんかほしいもんある？散

歩ついでになんか買ってくるけど」

黒歌
「なら、ちょっと小腹がすいたから、なにか頼んでもいい？」

龍牙
「あいよ、なら行ってくる」

・・・・・・

ふぅ、買うモノも買ったし帰るか、っと？あれはイッセーと彼女さんじゃないか、おお！なんかいい雰囲気だなちょっと覗いて行こうかな、明日弄る材料になりそう・・・と木陰に隠れ様子を伺う、なにやら良い雰囲気だ、俺の助言も役にたっているようだった、しかしすぐに違和感を感じた、イッセーもそれに気づいたらしく困惑している

???
「何をしている、レイナーレさっさとそいつを始末しろ、グズグズしやがって」

っと空から黒い翼を携えて二人を見下ろす奴が現れる、あれは堕天使か・・・・しかし何と言った始末と言ったか、あいつはイッセーを殺すつもりなのか！だが俺が動いた時には遅かった、男の堕天使が投

げた光の槍がイッセーを貫いた

龍牙
「イッセーぇぇぇぇぇ!!!!」

男堕天使
「なぜここに人間が!人払いの結界が貼ってあるはずなのに」

俺は男を無視してイッセーを抱きかかえると、そこに彼女も泣きながらやって来る

龍牙
「大丈夫か!イッセー!」

彼女
「イッセー君!だめ!死なないで!」

イッセー
「はぁ……はぁ……」

龍牙
「兎に角、おい、お前の名前とあいつの名前を教えろ!」

レイナーレ
「私は… レイナーレ、で彼はガルー様、私たちより上の堕天使です」

そうか、目的なんてどうでもいい、イッセーをこんなにしたんだ只じゃすまさねぇ、が俺にもずっと守ってきたもんがある、俺はイッセーを離れたところに寝かせ奴に対面する

龍牙
「おい、ガルーお前の目的とかそんなのどうでもいいがよ、先に言っておくホントは許したくねぇが、一度だけ許す、さっさと失せろ、こいつが死んじまう」

ガルーは一瞬顔に苛立ちを見せるが直ぐに元に戻る

ガルー
「ふん、脆弱な人間風情が図に乗りおって今すぐにそいつと同じようにしてくれる!!」

三下が言いそうなことを言い放ちガルーはイッセーの時と同じように光の槍を俺に投げてきた・・・ が、『ガキン!』っと槍は俺に当たる前に何かに弾かれる

龍牙
「言ったろうが、一度は許すと、だがお前は選択を誤った、俺はゼッテェ許さねぇ!」

薄っすらとしたエメラルド色をした鎧を着た男が現れる

ガルー
「な、なんだ・・・ それは・・・」

龍牙
「アベル!ヒートライザー!続けてチャージ!とどめにブレイブザッパー!!」

アベルが剣を掲げると三色のオーラと黄色いオーラを纏い、そのままガルーに向かい下から切り上げるように剣を振り上げる、ガルーは槍で迎え撃つも簡単に槍は破壊され槍ごとその腕を切り落とした

ガルー
「ぐあああぁっぁあぁ!!俺の腕が!!クソ!レイナーレ!さっさと引き上げるぞ!!来なければあいつがどうなるか分かっているんだろうな!!」

その言葉にレイナーレは苦虫を噛み潰したようみ顔を顰め、後を追うように飛んでいった、すぐさまペルソナを戻す

龍牙
「・・・逃げやがったか・・・ハッ、イッセー!」

俺は急いでイッセーの下に行こうとしたがそれを辞め、再びペルソナを出す

龍牙
「どういうつもりですか、リアス先輩・・・なぜ貴女が此処に、そいつに何かするなら貴方達でも容赦しない」

軽く殺気を出しながら、俺の目の前にいる、俺がちょくちょく顔を出している旧校舎でオカルト研究部の部長、リアス・グレモリーとその副部長の姫島　朱乃そして同級生の木場　祐斗、で後輩の塔城　小猫がそこにいた

リアス
「落ち着いて、私たちは貴方達を助けに来たの、それよりも早くしないとこの子本当に死ぬわよ！」

そうだ！イッセーだ、俺は倒れているイッセーの下に向かいペルソナで回復魔法を発動させる

龍牙
「サマリカーム！」

だが、現実は非情で傷が一向に塞がらない

龍牙
「クソっ！なんで治らね!!ふざけんな！もう一度！もう一度!!・・・おい！ふざけんなよ!!起きろよ！」

魔力なんて関係なしに何度も治そうとするが、イッセーの身体はどんどん冷たくなっていく、その度に焦りが増していく

リアス
「その子はもう・・・「黙れ！まだ・・・まだ諦めない！絶対に！」・・・っ！一つだけ方法があるわ」

その言葉に俺はリアス先輩を見た

龍牙
「まさか・・・悪魔にするなんて言わないよな・・・」

その言葉にリアスは驚くが直ぐに縦に首を振った

リアス
「・・・なんで貴方が悪魔の事を知っているか聴きたいけど、そんな事今はいいわ、そうよ、それ以外で彼が助かる道はないの、どうか聞き入れてくれないかしら」

龍牙
「・・・今の俺じゃ何も出来ない・・・それで、こいつが・・・ イッセーが生き返るなら、頼む・・・やってくれ・・」

そう言って俺はその場から5，6歩下がる、その隣に子猫が近づき手を握ってくれた、イッセーは悪魔の駒、兵士の駒を8つ消費してようやく悪魔として転生することが出来た、しかし俺の心は荒れていた

龍牙
「リアス先輩、イッセーのこと頼みます、俺の事もいずれ話します、から取り敢えず、今日はこのまま帰ります、気持ちの整理がついたらまた・・・・」

リアス
「・・・・わかったわ、またねリュウ」

そしてその日は解散となった

4話

『オキナサイ！　オキナサイ！　オ、オキナイナラ、キ、キス、スルワヨ・・・』

お気に入りのツンデレボイスの目覚まし時計の声を聴きながら、ずり落ちた床から這い上がる・・・

最悪の目覚めだ・・まただ、またあの夢だ、変な男に殺される夢そしてそんな俺をのぞき込むボロボロと涙を零した夕麻ちゃんの顔とエメラルドグリーンの鎧を纏った大男、此処まで鮮明に夢を覚えているのは変な感じだ、でも俺はいま此処で生きている、やはりあれは夢だなっと自分の中でそう結論付ける

「起きなさい！イッセー!!」

お袋の声に返事をし、最悪な気分の中、学校にいく準備をする

龍牙

「おう、来たかイッセー」

俺が家を出るとそこには幼馴染のリュウが妹たちと居た、どうやら待っててくれたらしい

光

「おっはよー！イッセー！」

雪音

「・・・・・おはよう」

桃花

「おはよう、イッセー君」

朝なのに元気いっぱいの光ちゃんに学園のマスコット小猫ちゃんに並ぶほどの無表情さをもつ雪音ちゃん、どうせならその姿まんまのツンデレであってほしいと思う桃花ちゃんから朝の挨拶を貰う

一誠

「おう、おはよう・・・・はぁ」
そんな彼女らに元気のない挨拶を返し、朝日でダルくなった身体で学校に向かうも道中、余りにも元気ない俺を光ちゃんと雪音ちゃんが心配し、声をかけてくる

光
「イッセー、ここ最近元気ないね～」
雪音
「・・・大丈夫？」
前の俺なら美少女に心配され内心舞い上がっていただろうが、そんな気も余りおきない、

龍牙
「・・・・」

そしてリュウも時折複雑そうな顔で俺を見ることが増えた、どうしたと聞いても「なんでもねぇよ」の一点張り、一瞬、「あいつもしかして俺の事・・」なんて身の毛のよだつモノを想像してしまって、とっさに尻を隠したのは仕方がないと思う、だが今はそんなことは置いておこう問題は俺の体だ、朝起きれなくなった代わりに夜はとてつもなく活発になってしまう・・・・
おかしい
明らかにおかしいのだ確かに夜更かしはするがそれでもせいぜい深夜1時位まで起きていれば奇跡と言えよう、なのに今では3時、4時位まで平然と起きていられるどうしたんだ俺の体は・・あの日、夕麻ちゃんとのデートからおかしくなってしまった

ーーー

共学になり男子も通うことが出来るようになったのだ！元女子高故に発言力も女子の方があるがそれでも女の子に囲まれて授業を受けたい！あわよくば沢山の女の子とムフフな関係に成りたい！そんなスケベ根性で難関と言われた試験を乗り越えて来たのだ！リュウやその妹たちには白い目で見られたが、スケベで何が悪い！これは俺の人生だ故に俺はこの学園でハーレムを作る！これが入学時に掲げた目標なのだが・・・・

一向に彼女が出来る気配すら無かった！一部のイケメンばかりモテる！しかもその一部にリュウも入っている！クソッ！やはり顔か！顔がいけないのか！それなら俺も負けてはいないはずなのに！何故だ！自己紹介の時にハーレム宣言したのが不味かったのか！分からん！それを聞いていたリュウからは『お前、馬鹿だろ』と真顔で言われた、チクショウ！そんな風に頭を抱える毎日だった

リュウの妹達と別れ教室に行き、席に着く因みにリュウの席は窓際の一番後ろだ

???

「よー、心の友よ！この前貸したエロＤＶＤどうだった？エロかったろ！」

開口一番爆弾発言してきたのは丸刈り頭の友人その１の松田だ、スポーツ万能なのだが、日常的にセクハラ発言をしているやつだ、部活が写真部な為か『エロ坊主』または『セクハラパパラッチ』と言われている

???

「ふー・・・今日は風が強かったな、お掛けでパンチラを拝めたぜ！特に光ちゃんと雪音ちゃんと桃花ちゃんのパンチラは最高だったぜ！」

龍牙

「そうか　元浜、いろいろ聞きたいことがある面貸せや」

元浜

「ひっ！」

そう言ってリュウに連れて逝かれた友人その２　元浜だ、その眼鏡は女子のスリーサイズを的確に測る能力を持つその事から別名『スリーサイズスカウター』と呼ばれている、しかし馬鹿な奴だリュウの前でその事を言って何度本体を割られれば気が済むんだ・・・・ただひとつだけお前に同意出来ることがあるパンチラは最高、俺はそれを真後ろからしっかり拝んだぜ

龍牙

「イッセー、後で俺のところに来い話がある」

・・・・・・・・神様ァ・・・・・ガタカダ

松田

「と、兎に角良いもん手に入ったぜ！」

ドサドサ

一誠

「ウワァ・・・・」

惜しげもなく机の上に卑猥な物が積み重なっていく遠くで悲鳴が聞こえてくる、まぁそりゃそうだな朝からこれだもんな、そりゃ罵倒が飛んでくるよな

松田

「騒ぐな！これはな！俺ら男にとっての秘宝なんだよ！ホラホラ、女子供は見るな！犯すぞ！脳内で！」

一誠

「相変わらず酷いな、その発言」

いつもの俺なら大興奮して「なんだ！このお宝の山は！」なんて言っていたが、朝があれなのでそんな気がそんなにおきない

松田

「オイオイオイ！こんなお宝を前にしてなんだ？その顔は！」

元浜
「最近ノリが悪いぞ！おかしい、実におかしい、今までのお前らしくない」

いつの間にか本体が割れた状態でつまらなそうに言う元浜
龍牙
「お前ら、自分の欲望に素直なのは良いが、場所を選べよ、周りにフォロー入れる俺の身にもなってくれ・・」
松田
「お前のようなイケメンには分からんだろ！」
そこには同意するが、リュウがフォローしてくれてなかったら今頃もっとひどい目で見られていただろう、それでもごみを見るような視線は向けられる、ちくせう・・・
一誠
「まぁ俺だって本当は『なんだよこの宝の山は！俺をモンキーにさせる気か！』って言いたいところなんだけどな、いかんせん此処ん所精力減退しててさ、そんな気があまり起きないんだ」
元浜
「病気か？お前が？まさかエロの権化であるお前が風邪になる訳がない」
龍牙
「まぁ確かに変態の一歩いや三歩先を行ってるイッセーが風邪ひいた所なんて見たことないな」
凄く失礼な事ばかり言う悪友と親友、これでも風邪くらい引いたことは・・・・・・・記憶に・・ないな、兎に角、そんな話をしていると松田が思い出したかのように手をポンと叩いて夕麻ちゃんの事を切り出してきた、俺がマジで覚えてないのかって聞いても三人とも知らない、病院行ってみたら？などだった、初めはからかっていると思った、でもリュウを除く三人で真剣に語り合った結果そうではないと痛感した

でも俺の記憶には「なんでイッセーなんかにいいぃ!!」や「まさか犯罪でも起こしたのか！」と言う失礼極まりない事を言って来た、俺も鼻高々に「お前らも彼女作れよ」と余裕の言葉を突き付けてやったのを覚えている、でもこいつ等はそれを覚えていない、いや違う、天野夕麻という女子そのものが存在していなかった、本当に「幻想」だったかのように、俺の手元にも居たという証拠は何もかも消えていた、写真もアドレスも何もかもなかった、おいおいこれじゃ俺ただの異常者じゃないか、でもそれでも俺は彼女の顔をしっかりと覚えている、どうも解せない、深夜に沸き起こる訳の分からない力といい何かが可笑しい、そんな俺の肩へ松田が手を置く

松田

「まぁ、思春期の俺らにそういう訳の分からないことだって起きるだろうさ、良し、今日は放課後皆で家に寄れよ、秘蔵のコレクションを楽しもうではないか！」

元浜

「それは素晴らしい提案だ、松田君、ぜひともイッセー君〝たち〟を連れて行くべきだよ！」

松田

「勿論だよ！元浜君俺ら欲望で動く男子高校生だぜ？エロいことしないと産んでくれた両親に失礼と言うものだ」

龍牙

「しれっと、俺も行くことになっているんだけど・・・いかねぇぞ」

松田

「龍牙！お前も一緒じゃないと意味ないんだよ！それで周りの女子から非難と罵倒されるといいさ！イケメンに慈悲はない！しかもお前あんなかわいい妹たちに囲まれてるんだ！いつもあんなことやこんな事させてるんだろ！この変態野郎が！」

松田よそれはブーメランというやつだ、しかし確かに悪くない、それに俺も変態で生きる男だ、松田の言葉に半ばヤケクソ気味に賛同する、周りの女子が「龍ヶ崎くんを汚さないで！」などの声が聞こえる

がそんな事はもうどうでもいいや！俺は二人の言葉に同意して今日の放課後、リュウを無理矢理連れて行くことを松田と元浜と決意した、そしてリュウにも俺達の苦痛を受けてもらうぜ！なんて言ったら、鼻フックをかまされた、痛すぎるもげるかと思った、暫く止まらない鼻血をティッシュでカバーする

そんな時だった俺の視界に紅が映った、鮮やかな紅、教室の窓から見える一人の女子生徒、ただ登校しているだけにもかかわらず、俺の・・・いや誰もかれもが彼女に釘付けだ

リアス・グレモリー

この学園の三年生。俺たちの先輩にあたる人だ

彼女の存在を一言で表すのなら〝美しい〟これに限るそのほかの言葉なんて思いつかない、現に俺は夢中になった、だがそれと同時に彼女に僅かながらの恐怖を抱くようになっていたそれも夕麻ちゃんが消えたその時から、そんな時だったふと彼女と視線がぶつかる

ーーーっ!!!

まるで心臓を鷲掴みされたかのような奇妙な感覚に陥る、彼女はこちらを見て少しだけ微笑んだ、俺なのか？まさか、そんな訳ない接点すらないのに、その時思い出すあの夢の続きを目が覚める最後に映った紅色の髪の誰かを、やさしさと冷酷さを併せ持ったように感じた人影、それが彼女と重なって見えた、しかし既に彼女は俺の視界から消えていた

---

side龍牙

放課後

俺はエロビを見せようと躍起になったイッセーたちを物理的に黙らせ、妹たちと帰宅していた

桃花

「イッセー君たちも懲りないね」
龍牙
「全くだぜ！こちとら、騎士団の調査報告書やら大陸の維持や生態管理とかで忙しいのによ」
雪音
「・・・この後・・ブロッサムヒルに行くの？」
ブロッサムヒル、俺が所属している騎士団がある国だ、自宅にあるゲートを経由して向かうため直ぐに行くことが出来る、今頃スイレン辺りが今日の分の書類などを用意してくれているだろう、今からなら飯を喰った後でも向こう時間で二、三時間で終わらせれるだろう、等と今後の予定を確認していると視界に黒髪の少女と金髪の少女が映り込む
二人
「っ!?」
だが2人は俺を見つけたとたん、逃げ出した
光
「・・・・なんかお兄ちゃん見たとたん、猛ダッシュして逃げたよ？あの二人なにかした？」
ジト目で見てくる妹をよそに俺は今後の予定を即座に変更した・・・・はぁ・・・すまんスイレン今日はいけないかもしれない。彼女は良く執務を始める前によくパイを焼いていてくれるのだが、間に合いそうにもない、心の中で謝りつつ二人を四人で追いかける
と言っても、直ぐに見つけた、つこけて盛大にパンツを丸出しにしている金髪少女と必死に起こそうとしている黒髪少女まぁ野郎からすれば目の保養になるだろうが、俺は紳士なので目を背けるその間に妹たちが彼女たちを連れて俺の下に戻って来た
龍牙
「久しぶりだな、レイナーレ」
俺の言葉に黒髪の少女、レイナーレは軽く睨みながら金髪少女を自身の後ろに隠した
レイナーレ

「何で、あなたが此処に居るの」
龍牙
「そう警戒すんな、こっちは何もしない、それよりその子は？見たところシスターか？」

レイナーレ
「関係ないわ、私たちにはやることｇ（キュ～）・・・・
緊迫した状態の中で思わず吹き出してしまった、レイ!?????ナーレは顔を真っ赤にしてふるふると震えている
金髪少女
「レイナーレ様お腹が空きましたね、どこか休息の取れる場所に移動しませんか？」
レイナーレ
「だ、大丈夫よ、これ位何と（キュ～）・・・・もないわ???」
どうも腹を空かせているようだ、仕方ない、俺は彼女たちを引き連れ近くのファミレスに立ち寄る、道中シスターの子、アーシア・アルジェントに此方も自己紹介をした、めちゃくちゃ礼儀正しい子や、なんていうのだろうか純粋っていうのかな、彼女ほどシスターに向いている子は居ないのではっと思うくらいいい子だった、ベルガモットバレーの大神官と合わせたら絶対に気が合いそうな気がするが、部下はいかんかね、あいつは如何せんドＳ過ぎるからな、可愛いんだが相手の苦痛の表情を見て興奮するのはいただけないかね・・・
龍牙
「まぁ今だけは、お互いの事なんて関係ないから好きに食べな、金は出すからよ、光たちも好きなもん頼みな」
と言ってもなかなか選ばないこの２人、仕方ないのでこっちで適当に選び、それを頼んだ、レイナーレからは余計なお世話よ！と言われたがアーシアは素直にお礼を言って来た何でも、まだ日本語があまり分からないらしく頼むに頼めなかったそうらしいしかもこの手の店自体初めて入るみたいだ、確かに日本語は簡単なものぐらいしか言えていない、これなら、仕方がない飯が来るまでの間、たわいのない話

をした
龍牙
「にしても、レイナーレが実はかわいい物が大好きなんてな」
レイナーレ
「な、なによ悪い？」
光
「そんなことないよ！私も好きだよ可愛いの！特にこのラッチュー君！」
アーシア
「わぁ～可愛いですね！実は私も好きなんです」

どうもアーシアは光が好きなネズミのラッチュー君のミニぬいぐるみキーホルダーが好きみたいだ、二人で仲良く話をしている姿を見てレイナーレは微笑みを浮かべた
桃花
「レイナーレさんやっと笑ってくれましたね」
レイナーレは「っえ？」っと言い自分の口を触って確かめた、その端は上がっており表情は慈愛に満ちたものだったが直ぐにそっぽを向いてしまった、雪音がツンデレだね、と言って顔を赤らめていた光景に思わず笑みが出る、そんな事をしている間に頼んでいたものが徐々にやって来た、アーシアとレイナーレにはカルボナーラ光と雪音は野菜炒め定食、桃花は天ぷら定食で俺が生姜焼き定食、サイドメニューでポテトと唐揚げを頼みデザートに各種アイスを頼んでいる

食事を済ませ外に出ると辺りはもう暗くなり始めていた、かなりの時間居たようだ取り敢えず今日の所は此処でお開きの様だ、それでもアーシアに友達が出来て良かった、レイナーレも初めはブスっとした顔をしていたが最後辺りはしっかり笑っていた、こうしてみると種族

が違ってもちゃんと仲良くれるんだなって思った、二人と別れ俺達は自宅に戻る
家に着き玄関を開けると目の前に
スイレン
「お帰りなさいませ、ご主人様　大変長らくお待ちしておりましたが中々お姿が見れないので来ちゃいました♪」

スイレンが待機していた、確かにこっちで3、4時間くらいだが向こうでは倍の時間は経っている
龍牙
「すまない、スイレン急用が出来てそっちに顔を見せれなかった、これから向かうがお前はゆっくり休め、疲れたろ」
スイレン
「問題ありません、さぁお食事は済まされているようなので、先にお風呂を用意しておきました、ごゆっくりどうぞ、私はこの後の準備をいたしますので、お先に失礼します。」
流石はメイド長、やることなす事完璧にこなすな、と思っていたがまさか風呂に突撃してくるとは想定外だったまさかの「お背中を流させていただきます」だったよ準備ってこの事か!?しかも全裸だし、流石フリーダムメイドありがとうございます!大変すばらしいお手前でした、この日はその後にブロッサムヒルに出向き何とか書類を捌きその日は終了した、ただ翌日俺は顎の骨がアニメみたいに外れるほど開いた口が塞がらなかった

龍牙
「なんでイッセーの家からリアス部長がぁぁぁぁぁっぁ!!!」

5話

side一誠

家を先輩と一緒に出ると目の前にリュウが口を開けたまま立っており、俺がリアス先輩と出てきたことに声を上げて驚いた、なんだそんなに驚かなくてもいいじゃないか！

龍牙

「・・・・あり得ない・・・エロとおっぱいだけが取り柄にも関わらず実は以外にヘタレなイッセーが女子をしかもよりによってリアス先輩を家に連れ込むなんて・・・・俺は朝から夢でも見ているのだろうか・・・・ドキドキノコを喰ったせいか？」

そこまで驚くことか！まぁ確かにいきなりリュウの家から先輩とリュウが出てきたら俺でも驚くかも、でもなんだドキドキノコって明らかにヤバそうなキノコだろ！

と、兎に角俺と先輩、リュウで学校に向かっているんだが視線がやばいやばい、まぁ俺が先輩のカバン持って従者の如く歩いているし、リュウの奴も気づけば後ろの方にいて、ニヤニヤしてやがるんだ、そのおかげであちらこちらから悲鳴やらあまりのショックで気絶している奴もちらほら・・・・泣いてもいいかな！そんなに駄目か！俺が一緒に歩くといけないのか!!

そんな事を考えているうちに玄関に到着

リアス

「後で使いを出すわ、放課後リュウと一緒に来てちょうだい」

微笑みながらその場を去って行った、使いとは何のことだろう、よくわからんがリュウと共にそのまま教室に入る、扉を開けたとたん、飛んでくる無数の好奇の視線と殺意の籠った視線、まさかリアス先輩と歩いただけでここまでなるとは・・・

ゴッ!!

突如、後頭部に鈍痛が襲いかかる、振り返ってみれば案の定松田がいた、その横には元浜もついている

松田
「どういうことだ！俺たちは昨日までモテない色男同盟の同志だったはずだろうが!!」
元浜
「取り敢えず、理由(わけ)を聞こうか。俺らと別れた後何があった」
涙を流し怒鳴る松田に対し眼鏡をクイッとクールに上げる元浜、二人とも鋭い視線を送って来る、今の度胸では先輩の生乳を見ただの口が裂けても言えないせめて〔男らしい〕くらいあればなんとかなるだろう、しかし俺の変態〔エロの権化　ＭＡＸ〕がそれをカバーした
一誠
「ふっ・・・お前ら、生乳を見たことがあるか？」
二人
「「なん・・・だと・・・・!?」」
その一言で二人は戦慄した、リュウの奴は・・・
龍牙
「ああ、あるぜ」
全員
「「「「えっ!?」」」」
えっ!!!
この爆弾発言によって松田と元浜がキャパオーバーしダウン、それを見計らってからのリュウの「まぁ冗談だけどな」によって事態が収束した

放課後・・・
ｓｉｄｅ龍牙
さてさて、ぼちぼち裕斗が来るころ合いかなと思っていると、教室の入り口から「どうも」と裕斗がやって来た
龍牙
「おいでなすったな、よう」

裕斗
「やぁ、先輩の使いで来たんだ、ついて来てくれないかい」
龍牙
「いいぜ」

そう返すと廊下、教室の至る所から黄色い歓声が沸く、相変わらずすごいもんだよ。初めの頃は余りの喧しさに耳を押えて二人でのたうち回ったもんだよ、人の声で超咆哮を喰らうとは思いもよらなかった、俺の所に来た裕斗は次にイッセーのもとに向かう
一誠
「で、何の御用ですかねぇ」
相変わらずイケメンに冷たいな、まぁ先輩からの使いで来たって聞いて目の色変えて真剣になった
裕斗
「僕と龍牙君について来てほしい」
女子達
「「「「いやぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」」」」
男子達
「「「「ぐおおおおお!!!!」」」」

女子達の放つ超咆哮によってクラスの男子全員が耳を塞ぎ余りの爆音に地面をのたうち回る、俺や裕斗、イッセーも例外ではない、まるで辿異種　ティガレックスの特大バインドウェーブを真横で聞いているかのような錯覚に陥る

なんとかあの地獄を三人で抜け出し、先輩の待つ旧校舎に向かった、だが既にイッセーは瀕死一歩手前、ＨＰゲージがあるのならちょうど火事場が発動しているだろう、裕斗も顔は平気そうにしているが、脂汗が見えている恐らく我慢しているのだろうな、何だろう・・・悪魔の二人に大ダメージを与える女子の悲鳴って並大抵の事じゃな

いよな、俺は慣れていたから大したことは無いがな！それは良いとして、さっさと旧校舎に向かう、二階建ての木造校舎を進み二階の奥にその場所はある

『オカルト研究部』

そう此処にリアス先輩がいる、裕斗は扉の前で一声かけ、返事があると中に入っていく、それに続き俺らも入っていく、心底驚いている幼馴染の親友を放置し俺は自分のいつも座る場所に向かい座る

龍牙

「おっす小猫、先輩はシャワー？」

小猫と言われた女子

「こんにちは、リュウ先輩・・はい、昨日浴びていなかったからだそうです」

俺の横に座りモクモクと羊羹を食べている少女・・・もとい塔城（とうじょう）小猫（こねこ）見た目は小学生っぽいがこれでも高校一年生だ、そして今更ながら入り口に居るイッセーに気がついた、それに気付いた裕斗がイッセーを紹介する

裕斗

「こちら、兵藤　一誠君」

一誠

「あ、どうも」

裕斗が紹介しても軽くお辞儀する程度、再び羊羹を貪るその姿に笑みがこぼれる、そして奥のシャワー室に気付くイッセー、おうおう、どんどんスケベ顔になっていっているぞ

小猫

「・・・・・いやらしい顔」

その言葉にこちらを向くも子猫は再び羊羹に夢中になるその姿に思わず苦笑いのイッセー、まぁそんなこんなやっているうちに、ジャーというカーテンが開く、どうやら上がったようだ、シャワー上がり独特の色気を醸し出す制服姿の先輩は俺とイッセーを見るなり、

微笑む
リアス
「ごめんなさい、昨夜、イッセーのお家にお泊りしてシャワーを浴びてなかったから、いま汗を流してたの」
あ、そうすか・・・・じゃなくてね、俺的にはなんでお泊りしたのかを説明してほしいんだけど、雪音も光も桃花も朝は居なかったが、バッチリ校門からくる俺らを見てるから
龍牙
「いや、どちらかと言えば何でお泊りしたのか大変気になるんですが、それは？」
リアス
「それについても後で教えるわ。朱乃、彼に自己紹介を」

そしてリアス先輩の背後からもう一人の女子、黒髪ポニテの姫島朱乃先輩だ
朱乃
「はい、部長　はじめまして、私は姫島（ひめじま）　朱乃（あけの）と申します。どうぞ以後お見知りおきを」
なんて品のある自己紹介をするのだろうか、俺の知っている自己紹介は初見、必ず「こんにちは！死ね！」だったからなぁと感傷に浸っていると、一通り終わったのかリアス先輩が切り出した
リアス
「うん、これで全員ね、兵藤　一誠君、龍ヶ崎　龍牙君。いえ、イッセーに、やっぱりこっちがいいわねリュウ」
「私達、オカルト研究部は貴方達を歓迎するわ
悪魔としてね」

朱乃
「粗茶です」
一誠　　龍牙
「あ、どうも」　「あざっす」

出されたお茶を一飲み、うん、うまい
全員がソファーに座り向けられる視線、イッセーは見た感じ緊張しているようだ、そしてリアス先輩が意を決して話し始める
リアス
「単刀直入に言うわね、私達は悪魔なの」
頷く俺に対し訳が分からなそうなイッセー
「イッセーは信じられないって顔ね、まぁ仕方ないわ。でもね、貴方も昨日の夜見たでしょ黒い翼の男、あれはね堕天使と言って元々は神に従えていた天使が邪な感情をもってしまったため、地獄に堕ちた存在、私達悪魔の敵でもあるわ」
「そして私達悪魔は堕天使と太古の昔から冥界・・・人間の言う所の『地獄』の覇権を巡って争っていたの、冥界は悪魔と堕天使の領土で二分化しているの、悪魔は人間と契約し代価を貰って力を蓄え、堕天使は人を操りながら悪魔を滅ぼそうとする、そこに悪魔と堕天使を問答無用で倒しに来る天使も含めての三すくみ、それを大昔から繰り広げているの」

うん、知ってる伊達に５０００年は生きてないから、そこら辺は頭に入ってる、でもイッセーは
一誠
「いやいや、先輩、いくら何でもそれはちょっと・・・・普通の男子高

校生の俺には難易度の高すぎる話ですよ、てかこれ、まさかもうオカルト研究部の話って言うか・・議題になっているんすか？」
リアス
「此処は仮の姿よ、私の趣味、本当は私達悪魔の集まりなの、リュウは違うけどね」

---

side一誠
お、俺はいま非常に困惑している、木場について行ってオカルト研究部なる所に連れてこられたと思ったら、まさか先輩の口から悪魔やら堕天使やらなんて単語がでてくるなんて、しかもここは仮の姿って・・・・どうっ考えても研究部の会話でしょ・・・そう思っていた彼女の名前が出てくるまで
【天野　夕麻】
なん・・・だと・・・その名前に俺は目を見開いた、何処でそれを・・・誰も知らぬ存ぜぬだったのに・・
リアス
「あの日貴方、彼女とデートしてたわよね」
胸の奥底からふつふつと怒りの感情が溢れてくる
一誠
「・・・冗談なら、此処で終えてください、いくら美人で巨乳のリアス先輩だとしても、怒りますよ。それにその話はこんな雰囲気でしたくない・・」
この話はリュウでさえ信じてくれなかったんだ、こんなの話したところで誰も信じちゃくれない、松田も元浜も俺の夢だ、幻だって、証拠だと思った携帯の写真すらなかった、まるで彼女の存在が元からなかったみたいに。どこでそれを知ったかはこの際どうでもいい、でもそれをオカルトうんぬんで語ってもらうと困るし、キレるでもリアス先輩ははっきりと俺の目を見て言う
リアス
「彼女は存在していたわ、朱乃、あれを・・」

リアス先輩は姫島先輩に指示をだすと、懐から一枚の写真を取り出す、それを見て思わず姫島先輩から写真を奪い取って食い入るようにみる、そこには背中から黒い翼が生えている夕麻ちゃんの姿があった

リアス

「彼女は堕天使、昨夜、貴方を襲った存在と同質の者よ、そしてこの堕天使はある目的のために貴方に近づいた、まぁもっとも彼女にとっては想定外の事だったのかもしれないわね、でも本来の目的は別の堕天使のおかげで果たされた、故にあなたの周りの者から自分の記憶と記録を消させたの」

どういう・・事だ・・・目的？でも想定外？

リアス

「彼女の本来の目的それは貴方を殺す事」

うそ・・・だろ・・なんだよ、それ！

一誠

「な、なんで俺がそんな!!」

思わず立ち上がる、俺をリュウがなだめる、落ち着けとなだめてくるが

リアス

「仕方なかった・・・・いいえ、運がなかったのでしょうね、殺されない所持者もいる訳だし」

一誠

「運が・・なかっただって・・・ふざけんな!!」

じゃあ俺は運がなくて夕麻ちゃんに殺されたってのかよ!!

あれ・・・・待てよ、なら今此処に俺は何だよ、自分の胸に手を置く、そこからは自身が生きている証がしっかりと伝わって来る、俺は生きてる、こうして生きている、どういうことだ？

リアス

「一つ勘違いをしてそうだから、言っておくわね、あの日あの公園で貴

方を光の槍で殺したのは天野　夕麻ではないわ、貴方は別の堕天使に殺されたの」

一誠

「夕麻ちゃんじゃ・・・ない？で、でも俺は生きてるっすよ！だいたいなんで俺が狙われるんだよ！」

俺はいま滅茶苦茶混乱しているだろう、でもなんで俺が・・・俺に狙われる理由はない、それにさっき先輩が言っていた想定外ってなんだ？

リアス

「彼女が貴方に接触した理由、それは貴方の身にある物騒な物が付いてないか調査すため、でもそこで想定外の事が起きた、それは彼女が貴方に一目惚れしてしまったこと、でもそれでも調べなければならない、だから時間をかけてゆっくり調べ、確定した貴方に神器が宿った存在だという事を、でも彼女にはそれが出来なかった」

【神器】

聞き覚えがある、夕麻ちゃんは俺に神器があることを言っていた

裕斗

「神器って言うのはね、特定の人間に宿る規格外の力の事。そうだね、例えば歴史に名を残した人の多くがその神器所持者だと言われているよ、神器の力で歴史に名を刻んだ」

朱乃

「現在でも体に神器を宿す人はいるのよ、世界的に活躍している方々がの多くが神器を有しているのです」

ほげぇ・・・そうなんだ知らなかったな、その後リアス先輩が更に話してくれた内容的には、大半が人間社会規模でしか機能しないものばかりで、でも中には悪魔や堕天使、更には神さえも脅かすものがあるらしい、それから俺は先輩に言われるがまま、神器を覚醒させるために俺の中で一番強いと感じる何かを想像してくれって言われた、でもまさかこの年になってドラグ・ソボールの空孫　悟のドラゴン波を同級生、下級生、上級生そして親友に見られながらの渾身のポーズを決めることになろうとは、しかもその瞬間リュウの吹きだす声が聞こ

えたし、でもおかげで俺の左腕にはコスプレイヤー顔負けの赤い籠手が具現し、ちょっとカッコイイと思ったのは内緒である、そしてここからリュウの話になった

---

side龍牙

ふぅ・・・さてさてイッセーの渾身のドラゴン波を見て一通り笑った後、当たり前ながら俺に声を掛けてきた

リアス

「さて、次はリュウよ、まず最初に貴方は何者なの？私達悪魔の事をしっていてなおかつ、あの鎧の人物あれは何なの？」

龍牙

「俺は普通の人間ですよ、悪魔の事は昔はぐれ悪魔に襲われて知ったんですよ、ペルソナはその時に覚醒しました」

俺は立ち上がり、意識を集中させると、幽体離脱のように俺からエメラルドグリーンの鎧を纏った三メートルぐらいの半透明の男が現れた、全員俺のペルソナに視線が集中する、イッセーに至ってはまるで信じられない物を見ているようなそんな顔をしている

リアス

「ペルソナ・・・・それは・・なんなの？あの時は距離があったから分からなかったけど、とても神々しい物を感じるわ、それも神に近いなにか」

龍牙

「こいつの名前はアベル、そしてペルソナとは心の奥底に潜むもう一人の自分。適正ある者のみが神や魔物の如き姿を持って具現され、自らの存在を脅かす者、相容れぬものと戦う事が出来る。これがペルソナだ、まぁイッセーの為に簡単に言えばこれはもう一人の俺だ」

裕斗

「アベル・・・旧約聖書に登場する最初の人間アダムとイヴの息子である兄のカインに弟のアベル、龍ヶ崎君の言う通りなら、神や魔物の如き姿はおそらくここからきているのだろうね」

裕斗が簡単な説明をしてくれた

リアス

「成程ね、本物ではないわけね、でもリュウ貴方も神器、持ってるわねそれとは関係ないの？」

え、何で知ってんの？俺が持ってるって、調べられた？まさっかぁ・・・・・そ、そんになに此方を見られても・・・

龍牙

「まさか・・・俺も調べられてたり？」

リアス

「いいえ、何もいしてないわよ、ただカマかけただけだから」

なんじゃそりゃ！え？俺こんな簡単なひかっけに捕まったの？つかひっかけか？これ、唯唯俺が間抜け晒しただけじゃん、ただそうなるとこれはイッセーの前で見せる訳には・・・・

裕斗

「へぇーどんなの何だい僕気になるな」

おのれ裕斗、お前のおかげで先輩たちまで興味津々じゃねぇか！それと朱乃先輩！「あらあら、楽しみね」って止めてくださいよ！此処は腹を決めるしかなさそうだ、ファントムソードや古龍の事は伏せておけばいいだろうし何とかなるか、俺はため息を吐きながら壁にスプリングガーデンに続くゲートを開く

龍牙

「俺の神器はペルソナとは関係ないけどこっちも召喚系なんだ、ただ実際に見てもらった方が早いからついて来てくれ」

そう言って俺はゲートを潜った

潜った先はブロッサムヒルにある俺の執務室である、そこには一人の女性、そう俺のサポートをしてくれているナズナがいる、書類のチェックなどをしていたのだろう、相変わらずパンツは透けて見えている、今日はピンクか・・・・

ナズナ

「あ！団長様、今日はお早いですね！こちらが今日の書類になります！それと・・・・」

ナズナが今日と今後の予定を教えてくれる、会議に害虫の討伐依頼、クジラ艇のメンテの報告書ｅｔｃ・・・

龍牙

「ナズナ、わ、分かった、分かったから、ちょっといいか？」

ナズナは小さく首を傾げる、かわいい

龍牙

「今から俺の友達が来るから、７人分のお茶の準備をしてもらってもいいか？」

ナズナ

「急な話ですね、分かりました！会議にはまだまだ時間がありますので、用意しておきますね」

ナズナは備え付けのこっちでの俺の部屋にある台所に向かい、俺は自分の椅子に腰かけ皆を待つ、直ぐに皆がゲートを抜けてきた、リアス先輩に続き朱乃先輩、裕斗、小猫でイッセー

龍牙

「ようこそスプリングガーデンにあるブロッサムヒルへ」

ｓｉｄｅリアス

「ようこそスプリングガーデンにあるブロッサムヒルへ」

私の目の前に飛び込んできたのは上質な執務用の机の向かいにあ

る椅子に腰かけるリュウの姿、その脇には鑑賞用の鎧に本棚にタンス、その上には観葉植物が置いてる

龍牙

「兎に角、せかっく来たんだソファーに座って下さいよ、今お茶入れてるんで」

そう言って席を立ち私たちの座るソファーの向かい側の一人がけに座った、視線を窓にやり外を見る沢山のレンガ造りの大きな建物が見え更に奥には満開の桜が沢山見える、とてもきれいな所ね、窓の外は桜吹雪が舞い春の訪れを表しているかのようだった、景色に見惚れている私の代わりに朱乃が聞いてくれた

朱乃

「龍牙君・・ここは言ったい何処なの？」

龍牙

「ここが俺の神器【スプリングガーデン】その中にある知徳の世界花『ブロッサムヒル』ですよ。俺はこの世界を神器として宿しているんです、そしてそろそろ派遣していた花騎士（フラワーナイト）が帰ってくるころ合いですね」

するとコンコンとドアがノックされ、そこから一人の女性が人数分のお茶を持って現れた

ナズナ

「お待たせしました」

そう言って全員に熱々のお茶を配ると彼女はリュウの横にお盆を持って立つ・・・しかしなんで下着が透けて見えてるのかしら・・・どうやらそう思っているのは私だけではなかったようね、イッセー以外皆リュウを見てるもの、リュウも頭を抱えている、そんな彼を尻目に彼女は自己紹介をはじめた

ナズナ

「初めまして！ブロッサムヒルにようこそ！私は団長補佐のナズナと申します！よろしくお願いたしますね！・・・・？なぜそこのお方は

顔を背けているのですか?それにそちらの方は凄いガン見ですね?私の服に何かついてますか?」
清清しい程　元気な挨拶ね、ただやはり祐斗は紳士だからか顔を背けている、一方イッセーは下着を穴が開くんじゃないかっくらいガン見しているわ、まぁ彼も男の子だからどうしても気になってしまうのかもね
龍牙
「イッセー、気持ちは分からんでもないがそれくらいにしとけ」

リユウの忠告その時扉がまたノックされた、どうやらさっき言っていた花騎士(フラワーナイト)が帰ってきたらしい、扉越しにも分かるほど、強い魔力を2つ感じる感じる
龍牙
「どうぞ〜」
ゆるーい返事を受け扉が開かれる、そこには緑髪にピンクの花が咲いた帽子に上半身は胸下が開いた緑と白の服下半身はスパッツに足装具と言う、体のラインがハッキリしている女性と黒薔薇の絵の入った着物に短刀、だが何よりその自己主張の凄いバストだろう、自身もスタイルには自信がある方だが彼女達は私よりスタイルがいい少し羨ましく思う
???
「よう!団長遊びに来たぞ・・って何だ客が居たのか仕方ない出直すか」

龍牙
「構わないぜ、ブラックバッカラ　サボテンは調査報告か?」
???
「・・・・うん」
成る程花騎士(フラワーナイト)って言うだけあるわね花の名前をコードネームに持つからそう言われてるのね
龍牙

「二人に紹介するな、この人たちは俺の部活仲間のリアス・グレモリー先輩と姫島　朱乃先輩、木場　裕斗に塔城　小猫、で俺の親友の兵藤一誠だ」

サボテン
「・・・・サボテンです・・・花騎士（フラワーナイト）で・・・副団長です・・よろしく」

ブラックバッカラ
「あたしはブラックバッカラだ、サボテンと同じ花騎士（フラワーナイト）だぜ、よろしくな」

リアス
「ええ、リアス・グレモリーです、皆さんこちらもよろしくお願いします」

朱乃
「姫島　朱乃です、皆様よろしくお願いいたしますわ」

私に続き朱乃が自己紹介を行った、更に裕斗、小猫が続く

一誠
「・・・・・・・・・」

ただ一誠は花騎士たちを見ず俯いている、どうしたのかしら

一誠
「・・・・なぁリュウ」

龍牙
「ん？どした？」

刹那イッセーはリュウに掴み上げた
「「「イッセー（君）!?」」」

一誠
「お、お前って奴は!!!」

龍牙
「あ～なんとなく言いたい事は分かった、けど一応聞くどした」
何が分かったのかしら、私にはわからないわ、でもそれも直ぐに分かっただってイッセー涙を浮かべながら
一誠
「お前って奴は！いつもこんな美人なお姉さん方と毎日イチャイチャしてんのか!!!?俺には分かるぞ！まだ他にもかわいい子が沢山いるんだろ!!この野郎ぉぉぉ!!他の子ともあんな事やそんな事！人前じゃあ言えないことだってしたんだろう!!!俺もこんな神器がほじがっだぁーー!!」
宥めるのに少し手間取ってしまったけど、フフッリュウが可愛い女の子たちと居るものだからやきもち焼いただけみたいね
ブラックバッカラ
「アッハハハハハ!!面白い坊主だね！」
一誠
「ぜひ！その立派なおっぱいを意見させてください!!!」
ブラックバッカラ
「えらくど直球に言うねぇ、面白い坊主だ、いいぜ」
一誠
「マジですか!?」
ブラックバッカラ
「マジマジ、ただし　そうだねぇ・・・あたしに勝てたらまぁタッチくらいなら許してやるよ」
一誠
「シャオラァァァ!!!!?」
子猫

「イヤらしい人」ボソ…

龍牙

「お前なぁ・・・・ぶっちゃけ止めとけお前じゃまず勝てねぇよ」

ブラックバッカラ

「なんだい、つまらない事言うね?やってみないと分からないだろ?」

龍牙

「俺が嫌なんだよ、それに・・・・」

リュウが席を立ちブラックバッカラさんの耳元で何かを言うとほんのり赤面させながらも優しい笑みを浮かべ『うれしい事言ってくれるね』と言った、リュウもどことなく赤くなっていた

一誠

「なぁなぁ!やらせてくれ!頼むよ!リュウ!」

ものすごい食い付きね、それから少し考えてから深いため息をするとしぶしぶ『わかった』といった

龍牙

「但し、もし万が一、天文学数値に等しい確率でイッセーが一太刀入れれたとする」

一誠

「とんでもない確率の話し方してやがる!?」

龍牙

「その時はまあ揉むは許さん、タッチ位なら仕方なしに認めてやる、まぁイッセーには悪いがまず勝てんよ」

確かに彼女からは結構な魔力を感じる、正直私もイッセーが勝てるとは思えないわね

ナズナ

「ブラックバッカラさんは王直属の花騎士(フラワーナイト)です、実力は並の害虫ならばそれこそ束になっても敵いません、それでもよろしいんですね?」

一誠
「あ、ああ！やってやる！そこまで言われて今更やめられるか！男の覚悟見せてやる！」
ブラックバッカラ
「お！いいねぇ！そうこなくっちゃな！」
龍牙
「因みに本音は？」
一誠
「一撃くらい入れてご褒美でタッチしたいです！後お仕置き覚悟で揉んでも見たいです！」
龍牙
「おいこら・・・はぁ、まあそれは明日な今日は俺もやることがある、暫くしたら解散な？」

この日はリュウが会議に行くまで続きその後全員解散した、明日は一誠に駒の説明もしてあげないといけないわね、まさかポーンの駒を全て使い果たすとは思わなかったけれど、イッセーにはなぜか期待してしまう、ちょっとエッチな所があるけどかわいいものよね、これから皆で頑張りましょうねイッセー

---

side龍牙

あの後会議が終わりスプリングガーデンから帰還した俺は外で待っていたイッセーと共に家に帰っている最中だ
一誠
「なぁリュウ、一つ聞いていいか？」
唐突だったイッセーが真面目な表情で聞いてきた
龍牙
「どしたよ、急に真面目になって、さっきのエロトークはどした」
一誠

「いや、ただこの神器が覚醒してからなんだけど、なんだがこれとリュウから似た感じの何かを感じるんだ、こう何ていうのかな、今日の話で皆に言ってない事があるみたいな、そんな変な感じがするんだ、俺の勘違いならそれでいいと思ったけど、なぁ教えてくれリュウ・・・・何かペルソナとか神器以外に隠しているのか？」

確かに俺はもう一つの神器、ファントムソードの事や古龍の事は伏せて皆と話した、イッセーにはその事について話したこともないし、匂わせるようなことも言ってない・・・・イッセーの事は信じているし、信頼もしている、変態だが俺にとってこの世界での二人目の人間の友達だ、だからホントは教えてもいいかなって思う自分がいる、でも俺が古龍の事をイッセーに話して万が一それがリアス先輩に知られたら・・・・そう思うと途端に怖くなる、例え悪魔だったとしても皆が俺を恐れた目で見られるのが怖い、あの戦争の時俺は各勢力のトップに近い奴らを単騎でしかも無傷で撃破した恐らくその事は、知られているはず、俺はそれに耐えられるのか・・・・どうやら俺は酷く人肌って言うものを欲していたらしい・・・・だから俺はイッセーを信じようと思う

龍牙

「・・・・この世界には沢山の種族がいる」

---

side一誠

突如話し始めたリュウに困惑する俺、それをしり目に話し始める

龍牙

「そして、その中でも最上位に立つのが神と言われる存在、そして同系列に自然神と言われる者たちがいる、それが古のドラゴン・・・・別名、古龍と言う」

古龍・・・・聞いた事がない自然神とかならゲームとかで聞いた事があるけど・・・・なぜ今その話を？

龍牙
「・・・・古龍は一体一体違う力を持っている、雷を操る者、風を操る者、中には嵐そのものを自身で起こし操る者、それゆえに古龍は太古から自然の力を使うもの、自然が具現化した者と呼ばれて来た、そしてその力は天災そのもの、古龍一体いるだけで街一つ滅ぶ力をもっている、だけどそんな古龍には王と呼ばれる彼らの頂点に立つ者がいる。彼らの力を超越する力をもつそれを人々は古龍王と呼んだ・・・古龍王の力は絶大で一頭いるだけで世界を滅ぼすことが出来るなんて言われている」
たった一頭のドラゴンの力で世界を・・・どんだけヤバい奴なんだそいつ、しかもリュウのこの物言いってまさかこの世界にいるって言うのかよ・・そのドラゴンが・・・考えただけでも恐ろしく感じる、部長から俺の神器は『龍の手（トウワイス・クリティカル）』ただ俺の力を倍にする能力と教えてもらった、すげぇガッカリしたけど、神器は思いに強く反応するだから俺の思い次第でどうにでもなるかもしれない、でも俺の今の心は自身より何億倍の力を持つ存在えの恐れがあった
龍牙
「そして・・・・その古龍王が・・・・俺なんだ・・・・」

一誠
「・・・えっ」
うそ・・・だろ・・世界を滅ぼせるだけの力を持った古龍王の正体が・・・・リュウ・・・なのか・・・何かの間違いだと思いたい、でも感じてしまった、リュウの中にとてつもない何かを・・・神器の所為なのか悪魔になったせいなのか俺は自分でも気づかないうちに震えていた、それに気づかないリュウじゃない
龍牙
「そう・・・だよな、怖いよな・・・・悪かったいきなりこんなこと言って・・・・・忘れてくれ」

そう言ってリュウは歩き出すその背中はとても小さく悲しく見えた・・・

・・・・・・違う・・・そうじゃない！俺の知ってる背中はとても大きくて頼りなって俺が一番憧れた、そんな背中だ、リュウがなんでこんな大切な事を俺に話してくれたのか・・・そんなの俺を信じてくれたからだ、それなのに俺が否定したら駄目じゃねぇか!!!俺はリュウの、龍ヶ崎　龍牙の幼馴染で親友なんだ！古龍だとか王だとか関係ねぇ！

一誠

「怖くねぇ!!」

龍牙

「っ!!」

こちらを振り向くリュウに俺は言う

一誠

「リュウは俺の大事な友達で親友だ！そんな奴を怖いなんて思わねぇ！俺の知っている古龍王は優しくて怒る時は誰かの為に怒れる、そしてみんなといつも笑っている、そんな奴だ！」

龍牙

「イッセー・・・お前・・・」♪♪♪

【リュウから強い信頼を感じる】

――――――――――――――――の意識覚醒準備の終了――――――――――――――――の信頼値が一定を超えました

神――具――――――――の能力に――――――――が追加されました　使用までの感情値が足りません

所有者の魔力　最底辺　力　最底辺　体力　小程　持久力　小程
知恵　中程

＿＿に至れません　更なる＿＿＿＿＿との信頼値と身体能力が必要

■□□□□□□□□

一誠
「っ!?」
なんだこの変な感じは、俺の中で何かが・・言葉では言い表せない何かがおきている、何かが俺の中にいる?そう思うもリュウの言葉に我に返る
龍牙
「まさかお前にそこまで言われるなんてな・・・・でもありがとよ、受け入れてくれて」
その後、俺達は帰り道をたわいのない話をしながらそれぞれの家に帰宅した